

「幕末徳島の書家 喜根井善種とその後裔

—十六歳の原鵬雲が描いた肖像画から始まる物語—

太田 剛

【論文概要】 喜根井善種は幕末徳島藩の御鉄砲組の年寄役でありながら、書道教師として二千人以上の人に指導し、晩年に千金の遺産を残した。現代の子孫の保管している肖像画（一八五〇年）と般若院の墓石の調査からそのことがわかった。その肖像画の画師が十六歳の原鵬雲である。鵬雲は一八六二年の幕府遣欧使節団に随行して約一年間西欧を旅し、日本人として初めて西洋絵画を直接鑑賞した人物であり、落款と箱書きから若き日の雅号が隼亭であることもわかった。彼がこの肖像画を描いたのは、師の守住貫魚同様、御鉄砲組の仲間であったからであろう。さらに善種の曾孫の陽次郎は、当時の進んだ徳島の学芸環境の中で育ち、帝大理科大学に進むも、家計の悪化で中退した後は旧制中学の教師となって、全国の若者に化学・物理・数学を指導した。石碑や書の資料を丹念に調べることでこのような歴史に埋もれた情報がよみがえり、子孫や地域住民の思考を深めることになるだろう。

【キーワード】 喜根井善種の肖像画 原鵬雲の初期の画と雅号 徳島藩の御鉄砲組 日本の近代化 喜根井陽次郎
はじめに

ここ数年、近世徳島の書道文化に関する調査が続いている。現在でこそ、小規模地方都市のイメージが強い徳島であるが、江戸時代後期から明治時代中期にかけてのこの地は、藍染料・砂糖・塩・タバコの生産などで栄え、日本の十指に入る大都市であった。そのために高度な文化が集積し、書道文化に関しても、素晴らしい遺物が多く、貫名松翁¹⁾を初めとする優秀な書画人を多く輩出したのである。ただ残念なことに、昭和二十年（一九四五）の徳島大空襲によって市街地は全焼し、そこに存在したであろう優良な書画作品の多くは灰燼に帰し、書画人たちの詳細な履歴も不明になって

しまっているケースが少なくない。僅かに残った断片を調査し明らかにすることで、まず住民自身が自分たちの文化に自信を取り戻し、今後の観光や教育の発展に資することが期待できる。

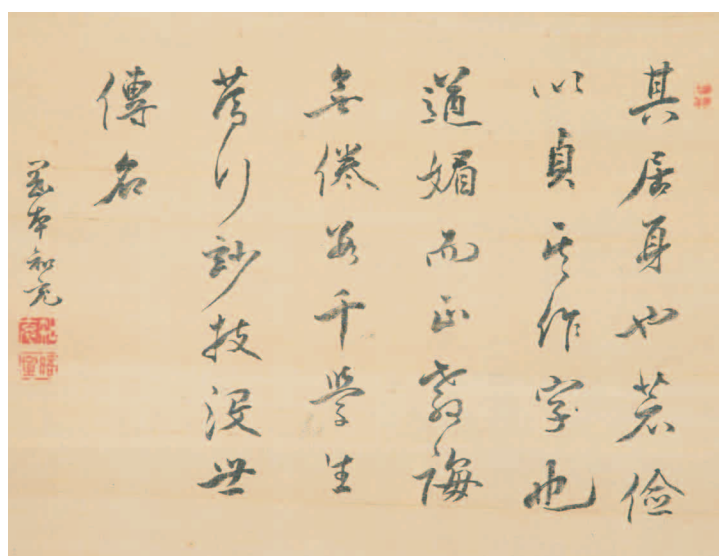
昨年（平成二十五年）十月末にアステイ徳島で行なわれた「徳島ビジネスチャレンジメッセ²⁾」に、四国大学代表として書道文化学科がブースを出す事になり、学生を連れて参加した。ブースでは、学生の書道の活動を紹介するとともに、来場者の希望に応じてその場で学生が作品を書く活動を行なった。様々な企業がブースを出しているの、休憩時間にはそれらを見学して多くの担当者たちと話をしたが、その中で知り合ったのが、資源再生の優良企業である株式会社フジダンの営業担当者、喜根井恒児氏で

ある。フジゲンは工場と社長宅が四国大学に隣接し、現在校舎の建っている土地の一部は、かつてこの社長の畑を譲っていたという、極めて関係が深い企業であった。蛍光灯には水銀が使われており、そのまま割って廃棄すると危険な環境汚染を起こす怖れがあるのだが、この企業はそれに対する安全なリサイクル技術を持っている。

喜根井氏は、かつては石川県金沢市の機械メーカー株式会社サワヤの営業担当者で、フジゲンにも機械を売り、アフターサービスのために来徳も多かった。実は喜根井家の先祖が徳島藩士で、その墓がいまだに徳島市にあったことも一つの理由である。定年退職後の現在は東京都八王子市在住だが、その高い営業能力と地縁を買われ、平成二十二年（二〇一〇）から、フジゲンに毎月一週間程度の非常勤営業社員として勤務することとなった。

工場が大学に隣接することもあってメッセ終了後も喜根井氏とは交流が続く、極めて親しくなった。そして幕末に存在した先祖の徳島藩士、喜根井善種^③の肖像画と賛の軸写真を見せられ、賛の解説を依頼された。この肖像画軸自体は現在、山口県在住の喜根井氏の長兄が管理されている。最初はその肖像画の揮毫者が誰かわからなかったが、やがて箱書きから、これが徳島藩の有名な画師原鵬雲の稀少な若描きであることがわかり、藩儒岡本晤室^④の書いた賛から、喜根井善種が徳島で著名な書道教師であったことが判明した。後日さらに喜根井氏の依頼により、徳島市寺町の般若院にある墓碑を採拓し、岡本晤室撰書の碑文を読んでみた。その結果、喜根井善種に関する更なる詳細情報を得た。調査が進展するにつれ、善種の子孫の情報も集まってきた。これらに解説を加え小論としてまとめる次第である。

一 喜根井善種 肖像画賛（縦一〇九cm・横四十二cm、喜根井家蔵）



其居身也、恭儉以貞。

其作字也、遒媚而正。

教誨無倦、数千学生。

篤行妙技、没世傳名。

岡本知充

其の身を居するや、恭儉^⑤にして貞を以てす。

其の字を作すや、遒媚^⑥にして正し。

教誨^⑦に倦むこと無し、数千の学生。

篤行^⑧の妙技^⑨、没すれど世名を傳えん。

岡本知充（白文印…知充、朱文印…晤室）

現代語訳

その行動はうやうやしく慎み深く、また真面目であった。

文字を書けば、筆力が強く美しく、また誤りがなかった。

人を教え諭すことに飽きることはなく、数千人の生徒を指導した。

誠実な行動と素晴らしい書道技術によって、彼の没後も代々世に名を伝えられることだろう。

●喜根井善種は多くの生徒に慕われる書道の先生だった。この賛は、善種の嗣子である文行が岡本晤室の教え子だったので、頼んで書いてもらったものである。肖像画に関しては、後の章で詳細を述べる。岡本晤室は賛の中で、後世にも喜根井善種の名が伝えられることを予想しているが、彼の名は徳島県ではほとんど忘れられていた。むしろこの肖像画と賛によつて現代によりみがえることになる。

二 喜根井善種 墓碑



徳島市寺町 般若院



前面

寿岳栄昌居士
唯心貞浄大姉
光室瑤林大姉
光曜知寛居士
知心童女

〔同側面〕（北側面・南側面）

嘉永二年己酉八月十四日喜根井翁卒。踰月嗣子半左衛門來謁余以其墓表余按其狀曰 翁諱善種字為藏世為御鐵砲組寛政中考周右衛門君老病致仕時 翁甫十六歲為人恭謹勤于職事居十六年為年寄役又三十七年而沒在職終五十三享年六十八 翁幼嗜書從曾根維石學甚勤勉及業成授徒丁寧詳覆未嘗倦是以遠近輻湊日垂三

百人前後受業者蓋二千餘人性至孝襲職之日家道蕭然其奉二親每不如意晚年貨殖殆致千金而二親則既沒 翁深以為憾於是終身敝衣疏食未嘗御甘美蓋有所不忍也配田村氏先卒 一男曰敬太又配吉田氏亦先卒 一女亦天養姪文行為嗣即半左衛門襲職半左衛門夙遊于余之門矣

岡本知充撰并書

側面墓碑の書き下し文

嘉永二年己酉八月十四日、喜根井翁卒す。月を踰て嗣子半左衛門來たりて余に謁するに、其の墓表を以てす。余、其の狀を按べて曰く、翁諱は善種、字は為藏、世御鐵砲組たり。寛政中、考周右衛門君老病にて致仕す。時に翁甫十六歳。人と為り恭謹に、職に勤め、事え居ること十六年、年寄役と為りて又三十七年、而して沒す。職に在ること總て五十三年、享年六十八。翁幼くして書を嗜み、曾根維石に從いて学び甚だ勤勉、業成るに及びて徒に授く。丁寧詳覆、未だ嘗て倦まず。是を以て遠近輻湊し、日に三百人に垂んとす。前後に業を受けし者は蓋し二千餘人なり。性は至孝なり。職を襲いし日は家道蕭然として、其の二親に奉ずる

にも毎に意の如くあらず。晩年貨殖し殆んど千金に致れども、二親は則ち既に沒す。翁深く以て憾と為し、是に於いて終身敝衣疏食、未だ嘗て甘美を御さず。蓋し忍びざる所有らんや。田村氏を配すも先に卒し、一男を挙げ敬太と曰うも夭し、又、吉田氏を配すも亦先に卒し一女を挙げて亦夭す。姪の文行を養いて嗣と為す。即ち半左衛門なり。職を襲う。半左衛門は夙に余の門に遊ぶなり。

岡本知充撰并（なら）びに書。

現代語訳

嘉永二年（一八四九）八月十四日、喜根井翁は亡くなり、翌月に嗣子である半左衛門が私のところに会いに来て、墓表を書くように依頼した。そこで私は彼が持ってきた履歴書を調べながら、喜根井氏について次のように書くものである。

喜根井翁の諱は善種、字は為藏。代々、徳島藩の御鐵砲組の武士である。寛政九年（一七九七）に父親の周右衛門は老いて病氣になり仕事を辞めた。この時、善種はわずか十六歳であった。性格は丁寧で慎み深く、父の職を継いで仕事すること十六年間、さらに御鐵砲組の年寄役となつて三十七年間。そして亡くなつた。総在職期間は五十三年間。享年は六十八歳である。善種は幼い時から書道をたしなみ、曾根維石に入門して学び、極めて勤勉であった。ひとかどの力を付けてからは人にも書の指導を始めた。教え方が丁寧で、生徒が疑問に思う点はどこまでも詳しく調べ、未だかつて教えるのに飽きるということがなかった。そのため、近所ばかりでなく遠方からも人が教えを求めて集まつてきて、一日に三百人にも達するほどだった。善種が生きている間にその指導を受けた人はおそらく総計二千人以上はいるであろう。善種はとても親孝行であったが、親から職を継いだ直後は家の生計はたいへん厳しく、両親の面倒をみるのも思い通りにはいかなかった。晩年には経済的に豊かになつて貯蓄も一千金ほどにもなつた

が、その時には両親はもうこの世に無かった。善種はたいへん遺憾に思い、生涯やぶれた衣服と粗末な食事で過ごし、決して衣服や食事に贅沢をしなかった。きつと、自分がしっかり親孝行をできなかったことを悔いていたからなのだろう。最初の妻は田村氏から嫁いだが先に亡くなった。一人の男子を産み名を敬太と言ったが若くして亡くなった。また、二番目の妻は吉田氏から嫁いだがやはり先に亡くなった。一人の女子を産んだが、やはり幼くして亡くなった。そこで、甥の文行を養嗣子とした。つまりはこれが半左衛門であり、御鉄砲組の年寄役の職を継いだ。半左衛門は若い時から私に入門して学んだ人である。

岡本晤室が撰文ならびに書。

●墓表の五名の没年を年代順に並べ替えた。

文政四年	(一八二二)	九月二十六日	先妻	モセ
文政八年	(一八二五)	十二月二十一日	二女	コト
天保十二年	(一八四一)	二月八日	嫡男	敬太
嘉永二年	(一八四九)	五月二十八日	後妻	キセ
嘉永二年	(一八四九)	八月十四日	喜根井家二代目	善種

一八二二年、善種四十歳の時に先妻モセが亡くなって、しばらくして後妻キセを娶り、女子コトが生まれるも三歳以内には亡くなった。嫡男²⁷の敬太が一八四一年、善種六十歳の時に亡くなったが、この時の敬太の年令は「夭逝」の部類にはいるのであれば通常は三十歳以前である。仮に先妻モセの死因が敬太のお産にあるとすれば敬太は二十歳であり、実母がモセであることは確かであるから、それ以上の年令である。つまり敬太は二十〜三十歳程の青年だったことがわかる。善種にとつての希望の星を亡くしたショックは、かなりのものだったろう。当時は家門に男子の嗣子がいなければ断絶させられたので、それから八年の間に、甥の文行を養嗣子にし

た。当時このような養子縁組はよく行なわれた。文行の実父はおそらくは善種の妻の兄弟だろうと思われるが、名前や生没年は不明である。一八四九年には後妻キセも亡くなり、その三ヶ月後に善種は亡くなったのである。善種が書道を教えることに極めて熱心だった背景には、このように自らの子供たちが早く亡くなったことに対する深い悲しみ、そしてそれを埋めるため、他の若者の成長を楽しむ心があったことが想像できる。

晩年には一日三百人が書を習いに来て、受業者の総数は二千人以上いたというのが驚きである。それだけの指導をこなすには、ある程度大きな教室を自宅に造る必要があったし、善種は相当多忙だったろう。現代の感覚とは異なるが、岡本晤室は「千金」という巨大な貯蓄金額を碑文に記載することで、善種の仕事の偉大さをアピールしようとしたのだろうと思う。現代の金額で約五千万円の価値のあるこの遺産が、後裔や周囲の人々の人生にも大きな影響を与えていくことになる。

尚、両側面の岡本晤室の楷書は独特な抑揚を持つ扁平な字形で、个性的魅力がある書風だが、この前後面の戒名と生没年を書いた楷書は切れ味に乏しい書風で、あまり書き慣れていない別な人物の書である。

三 喜根井周右衛門 墓碑



喜根井周右衛門 墓碑拓本（北側面・前面・南側面）



北側面

喜根井周右衛門

前面

頓覺法王居士

南側面

寛政十二庚申年 四月廿五日

法雲徹生大姉

文化三丙寅年 十一月八日

長次郎童子

安永七戊戌年 正月廿一日

幻順童子

寛政二庚戌年 正月十九日

●これらを時代順に並べ替えた。

長男（善種の兄） 安永七年（二七七八） 一月二十一日

三男（善種の弟） 寛政二年（二七九〇） 一月十九日

喜根井周右衛門 寛政十二年（二八〇〇） 四月二十五日

妻（善種の母） 文化三年（二八〇六） 十一月八日

喜根井善種墓碑に隣接して、父親の周右衛門の墓碑が建てられている。

南側面は剥離分解しているので、破片を集めて採拓して読した。この書

は極めて品格が高く、かなり修練した者の揮毫である。有名書家であった

喜根井善種の、確かな作品は今のところ存在しない。父親の墓表を善種が

揮毫したことも考えられるので、この達筆の墓表の文字は重要である。

善種の家族は早世した者が多かったのは既述したが、彼の父親の家族も

その傾向が強かった。喜根井本家から独立した喜根井分家初代の周右衛門

には三人の男児がいただろう。しかし、そのうちの兄と、弟の一人はや

り早世していて、後に喜根井分家を継いだのが天明二年（一七八二）生ま

れの善種である。この他に女児がいて嫁に行つた可能性もあるし、もう一

人の男児がいて幼い時期に他家に養子に行つた可能性もある。いずれにし

ても善種は、兄弟の多くと早くに別れ、十九歳の時に父を、二十五歳の時

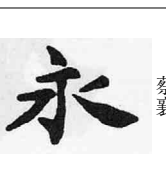
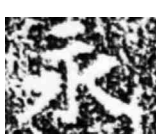
に母を亡くしたのである。常に喜根井分家を一身に背負う厳しい運命に

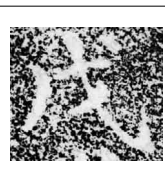
あつたことがわかってきた。善種がお金よりも、「人」に対する深い愛情

を持つに至る背景がますますはつきりした。

次に、特徴的な文字を古典と比較する。次頁はその比較表である。

四 喜根井周右衛門 墓碑の書風分析

年	永	周	化	右	
					喜根井周右衛門 墓碑
					蘇軾
 柴野栗山	 蔡襄				米芾
				 名	岡本晤室

郎	順	長	戊	子	
					喜根井周右衛門 墓碑
 蘇軾	 空海	 蘭亭序	 褚遂良	 蘇軾	
 黄庭堅	 趙孟頫	 篠崎小竹	 顔真卿	 趙孟頫	
 頼山陽					貫名松翁書 山田公雪宛碑

「喜根井周右衛門墓碑」の文字は、行書混じりの楷書である。古典との比較を試みたところ、最も似ているのは蘇軾の楷書・行書である。直線構成でありながら、線の太さを適度に曲線的に変化させること、右上がり強い横画もほぼ同じである。

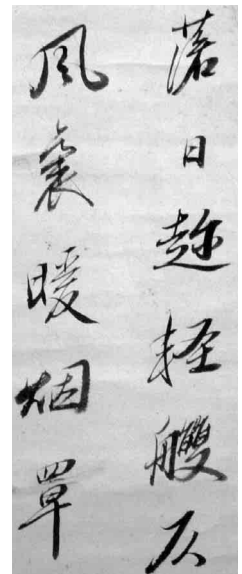
蘇軾の門下・交流者である黃庭堅・米芾、また次の時代にそれらを受け継いだ趙孟頫の書風に似ている文字も多い。一文字の中で一画のみを長々と伸ばし、横画の終筆にこぶを作ったり、跳ねの一部に顔法を混ぜるところが同じである。また、空海の書の影響も垣間見える。年代が書かれている南側面の章法は、行を越えて、横画の角度方向の斜めの構成が考慮されている。

この碑の揮毫年代は、彫られた中で最も新しい没年である文化三年（一八〇六）後であるが、この年は善種はわずか二十五歳である。碑文によれば、善種は若年には経済的にかなり厳しい状況であったということなので、このように立派な墓石を建立する余裕はなく、少し後年になった可能性もある。この頃、徳島藩儒から昌平黌の総裁となって寛政異学の禁を実行した柴野栗山²⁸は、多くの尊敬を集めていた。栗山は書にも造詣が深く、特に王羲之・蘇軾・米芾を熱心に学んだ。その影響が考えられる。



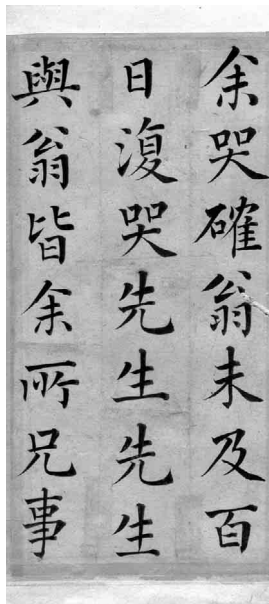
柴野栗山の
行書作品（部分）
（著者蔵）

またこの頃、京都では村瀬栲亭²⁹が活躍していた。栲亭の父は徳島出身の医師で京都に出た。栲亭は武田梅龍に古註学を学び、秋田藩に招かれて藩儒となった。致仕後は京都に家塾を開いて教授し、詩文・書画に長じた。書は蘇軾や明人をよく学び、その右上がりのお洒落な書風は非常に人気があった。墓碑の文字は栲亭の行書作品に比べ、力強さや温順さではむしろ優れている。



村瀬栲亭の
行書作品（部分）
（富久和代氏蔵）

更に「長」字のように、篠崎小竹³⁰の書に類似する文字もあり、全体に横画の終筆や跳ねの用筆法に共通点が多い。小竹は喜根井善種とほぼ同時期に大阪で活躍した儒者であるが、徳島藩筆頭家老稲田氏の賓師として先代篠崎三島³¹の時代から年に何度か淡路に来ていたので、徳島での門人も多かった。当時彼の書風は関西で極めて人気があったが、それは彼のオリジナルというよりは、当時の関西の文人の間で流行していた書風の典型と考えて良い。頼山陽³²や、徳島出身ながら京都で活躍していた貫名菴翁も同様の表現を使っている。善種の墓碑を書いた岡本晤室の書法にもこれは受け継がれている。



篠崎小竹書
「渡辺長城墓表」真蹟原本
文政10年（1827）
（四国大学図書館蔵）

喜根井周右衛門墓碑の揮毫者は、栗山や栲亭の書風を参考にし、当時関西で流行の蘇軾や米芾の書法をよく学んで自分のスタイルを作り上げたのだと思われる。この墓碑の揮毫者が善種であるか否かは、今後の研究に俟つことになるが、いずれにしても、この時期に徳島にこのような美しい書風を書く人物がいたという事実が、この地の書道文化の優秀性を示している。

五 喜根井善種肖像画について

① 喜根井善種肖像画



私は絵画の専門家ではないが、今回は縁あって喜根井善種の肖像画軸全体を調べることにしたので、歴史的観点を中心に、自分の出来る範囲で作品の分析を試みたいと思う。貴重資料なので、今後、碩学諸氏の更なる分析を期待するものである。

この肖像画を見ると、善種が書を教えたといっても、今日の書道のように大きな筆で半紙や条幅にダイナミックに大きな文字を書くタイプの書道ではなく、小筆で日常の文書や書簡を書くような書道であったことがわかる。つまり、今日流に言えば、ビジネス文書や実用書を、作文の仕方を兼ねて教えるようなものであり、当時公用に使われていた御家流や、儒者が日記や文書を記す際に使う程度の漢字と仮名交じり書などが中心だったのでないかと想像される。二千人余の受業者がいたのに、善種の揮毫した条幅などが徳島に全く遺されていない理由もそこにあるだろう。彼の技術は、徳島の人々の日常書の中に溶け込んだのである。

② 肖像画の落款印

白文「原雀亭印」(回文印) 朱文「雀鳴于九臯聲聞于天」

書き下し文「雀九臯^{きゅうこう}に鳴き、声天に聞こゆ」

現代語訳 深い谷底で鳴いても、鶴の声は天に聞こえる。賢人は身を

隠しても、その名声は広く世間に知れ渡るといふ喩え。



③ 原鵬雲の肖像写真 文久二年(一八六二)パリにて

「維新史料引継本」(遣欧使節一行写真 東京大学史料編纂所所蔵 より)



③ 手(指が細く弱々しい)

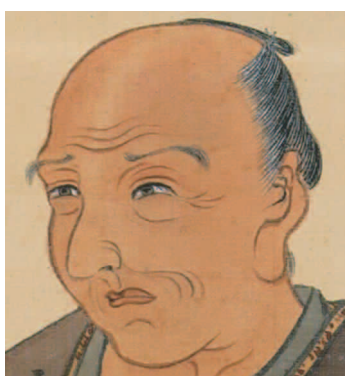


④ 水差し(形がゆがんでいる)



⑤ 喜根井善種の顔

(耳の立体感の表現が不自然)



⑥ 久保伸輔写の柴野栗山像を守住

貫魚が写した草稿(部分)

安政三年(一八五六)

(徳島県立博物館蔵)



⑦ 箱書き（上蓋表面）

宗祖善種翁之像

賛 岡本晤室先生
画 原一介雀亭



⑧ 箱書き（底面）

嘉永三庚戌年仲秋出来（一八五〇年八月）

喜根井蔵



1 喜根井善種肖像画の作者について

この肖像画軸の箱書きは、おそらく岡本晤室門下である喜根井家三代目の喜根井文行（半左衛門）が書いたものであろう。善種の養嗣子だけにこの書も達筆で、前述の栗山や桒亭の書を彷彿とさせる。このような小字の実用書こそが善種の教授していた書道であり、文行も善種の教えを受けたので箱書きを完璧な形で書いて遺したのだらう。ここに揮毫者の氏名・雅号・完成年代が書かれていたことが極めて幸運であった。これによって、制作時の様々な状況がわかるからである。

善種は嘉永二年（一八四九）八月十四日に六十八歳で亡くなり、翌、嘉永三年（一八五〇）にこの肖像画軸は二十八歳の文行の発案によって制作されることとなり、八月に完成して一周忌の折に披露された遺影であらう。

今日であれば遺影は多くの人が写真で遺すのであるが、写真術普及前には富裕な者のみがこのような遺影を画師に描かせている。後掲の年譜で計算すると、岡本晤室は四十三歳、原鵬雲は十六歳である。墓碑文からわかるように岡本晤室は文行の漢学の師匠なので、賛を書く理由はある。しかし、わずか十六歳の原鵬雲がなぜこの肖像画を描くこととなったのだろうか。その経緯はどこにも書かれていない。

この前後の徳島の著名人の肖像画を描いた時の画師の年齢を以下にいくつか調べて比較してみると、守住貫魚³門下の何人かも含めて、その多くは画師が四十〜五十歳代の時期に描いたものである。遺影として後世に遺すに当たっては、高い技量と大きな責任が生じたはずで、やはりある程度経験を積んだ画師に任ずるのが普通である。

制作年	被写人物	画師	画師年齢
一八〇二	柴野栗山	久保仲輔 ³⁵⁾	五十歳
一八五〇頃	武田猶龍	小澤輝興 ³⁶⁾	四十五歳頃
一八六八	豊岡荔墩	佐香貫古 ³⁷⁾	五十七歳
一八八二	吉田栄左衛門	森魚淵 ³⁸⁾	五十三歳
一八九六	三木アサ	野口小蘋 ³⁹⁾	五十歳

これを知るためにまずは、原鵬雲について詳細に調べねばならない。そこで、江川佳秀氏の論文と、『阿波洋学史の研究』・『秘められた阿波史』から抜粋した。

原鵬雲^{はらほううん} 天保六〇明治十二（一八三五〇七九）。享年四十五歳。字は士龍、通称は市助・一介・介一・覚蔵。雅号は鵬雲。徳島藩の銃卒で、現在の徳島市秋田町に住んだ。幼時から才気あり座談に長じて人品に優れ、画を描くことを好んだ。弘化四年（一八四七）七月十六日、十三歳で守住貫魚に入門し住吉派の画技を学んだ。安政一年（一八五四）初春にはペリー提督が再来日したのを受け、幕府は徳島藩に大森・羽田の警護に就かせ、鵬雲も銃卒の一人として出陣し、「徳島藩大森羽田出陣絵巻」を描いた。

文久一年十二月二十二日（新暦では一八六二年一月二十一日）からは幕府による遣欧使節（総勢三十六名）に随行し、約一年間かけて見聞きしたものを描き残している。この出発時、鵬雲は二十八歳であった。旅行した国はフランス・イギリス・オランダ・プロシア・ロシア・ポルトガルの各国で、その前後には清国・インド・エジプトなどにも立ち寄った。使節団における鵬雲の立場は「小使人足並御賄人足」の一人である。使節団の正式メンバーでなく武士の扱いでもない。使節団の世話をするために、幕府御用商人が手配した「人足」であった。このような人足は、彼以外にも加賀・佐賀・長州・杵築などの藩からも七名が派遣されており、諸藩は海外情報を収集するためにこのような形で藩士を海外に送り出した。例えば鵬

雲は香港では現地の新聞を買い集め、駆通船に託して徳島藩邸に送っている。旅費は官費なので無料で、準備金も支給されるという厚遇である。旅行中は日本国内と同じ風俗習慣を守ることが強要されたので、彼らは髻に羽織・袴・腰に大小の刀を差し足には草履を履き、菅笠頭巾の姿で全行程をこなし、現地ではその珍しい姿を見たがる外国人達に大歓迎を受けた。フランスでは一行全員が個々に写真撮影をした。実は人類学の資料としての撮影だったのだが、御陰で現代の我々が③のように鵬雲の鮮明な顔写真を見ることができる。使節団内での鵬雲の重要な任務は、図画で西欧諸国の文物を記録すること、つまり実質的には「画師」だった。使節団が外国人とコミュニケーションをとる際に、言葉で表現できない部分は彼の絵が「画談」として役立つたという。各国の美術館では名作を見て感激し裸婦像の図を描いた。またロンドンのテムズ川の地下トンネルの断面図や教会の建物の詳細な図などが、今も遺されている。

同行した者の中で維新後に有名になったのは、幕府通詞の福地源一郎（二十一歳）⁴⁰⁾、中津藩通詞の福澤諭吉（二十七歳）⁴¹⁾、津山藩翻訳方兼医師の箕作秋坪（三十七歳）⁴²⁾、薩摩藩翻訳方兼医師の松木弘庵（後の寺島宗則・三十歳）⁴³⁾、長州藩賄方兼小遣者の杉聴雨（二十七歳）⁴⁴⁾などである。（年齢は一八六二年時点）彼らはいずれも鵬雲と年代が近かったから、海外で一年間苦労を共にすれば、その後に続く友情も生じただろう。

帰国直後の日本では一時的に攘夷運動が過熱して、折角の彼らの体験をすぐに社会に活かすことは難しく、鵬雲はしばらく兵士として従事した。この間、江戸藩邸に詰めていた時期に、幕府開成所で高橋由一⁴⁵⁾等と共に油絵を学んだのではないかと考えられている。維新後の明治三年（一八七〇）十月には徳島藩校の三等助教となって洋算を、翌四年（一八七二）からは徳島洋学校で図画を教えた。ここでは恩師の息子である守住勇魚⁴⁶⁾が入学して、学生として通いながら鵬雲の助手を勤めた。貫魚との交流も続いていたわけである。更に明治五年（一八七二）十月からは文部省に出

仕し、同七年（一八七四）に赴任した官立広島師範学校では洋画を教えた。同十年（一八七七）に描いた油彩画が現在も徳島県立近代美術館に所蔵されている。しかし同十二年（一八七九）広島に流行したコレラに罹り、八月一日、四十五歳の短い人生を終えた。彼は、日本で最初に西洋絵画の実物を目撃した画師であり、日本近代洋画の黎明期を彩る画家の一人であるが、現存作品は少ない。

江川佳秀氏の解説には、「原鵬雲の経歴には不明な部分が多く、特に前半生に関してはほとんど資料がない。生地や家系も分からない。」とある。（『特別展 西洋美術との出会い——徳島の四人 原鵬雲・井上辨次郎・守住貫魚・守住勇魚』）制作年代の確かな作品としては安政一年（一八五四）が最も早いとされているが、この肖像画はそれよりも四年早く描かれた、最も初期の作品ということになる。

今回の肖像画の白文印にある、十六歳時の雅号である「雀亭」の「雀」は「鶴」と同じ意味である。原鵬雲の通称の一つが「寛蔵」であり、「寛」と「雀」が同じ音なので、それに因んだものである。また朱文印「雀鳴于九臯 声聞于天」の文句は、『詩経』にあり、その意味は「賢人は身を隠しても、その名声は広く世間に知れ渡る喻え」である。この雅号と朱文印から「将来、画家として名声を博してみせる」という強い未来志向が感じられる。これは守住貫魚からもらった雅号であり、貫魚の鵬雲に対する期待の大きさがわかる。実は同じ雅号は近世中期の画僧である黄檗鶴亭⁴⁷が既に使っている。

近世の徳島は、京阪との文化的なつながりが極めて強い。徳島藩儒となつた柴野栗山・岡田寧処⁴⁸、画師である鈴木芙蓉⁴⁹、筆頭家老 稲田氏の賓師であつた篠崎三島、平島公方足利義根⁵⁰を初めとして、大阪の木村兼葭堂⁵¹と接触を持っていた学者文人は多い。兼葭堂の画業の師匠である鶴亭のことは徳島でも広く知られており、その没後に、貫魚はその雅号を受け継ぐ存在としての期待を、才能ある若き門人にかけたのであろう。

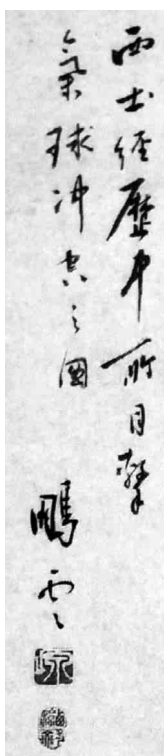
余談だが、私がかつて学生時代に卒業論文で研究した明治の書家 日下部鳴鶴⁵²の雅号も、『詩経』の同じ文言から取っている。

そして原雀亭（若き日の鵬雲）が肖像画を描いた最も可能性の高い理由は、喜根井家も原家も同じ銃卒であり、雀亭の父親も善種を良く知る人物で、さらに雀亭が喜根井善種から書を学んでいたのではないかということである。肖像画を描く時点で善種は亡くなっているわけだから、このとき画師が善種を良く知っていてその近くで接することが多かった人物であれば、生前の本人に近い肖像を描くことができる。

後年の原鵬雲の作品を見れば、落款の書もかなりの腕前といえる。例えば、原鵬雲の代表作である「気球冲空図」の落款の書はシャープな線と縦長の上品な結体をもつ上に、「中」「所」の文字などに独自の変化も加え、書作品の妙をよく理解している。



原鵬雲「気球冲空図」
紙本彩色（幕末～明治頃）
（徳島城博物館蔵）



右図の落款部分拡大 「西土経歴中所目撃気球冲空之図 鵬雲」 印…「原」〔西遊一斑〕

近世には「詩書画一致」という言葉があったように、文人画をたしなむ者は漢詩も書も上手なことを求められた。自画に自分の作った漢詩を自分の書で書き入れることもよく行なわれていた。例えば徳島出身の著名な書画家で、善種より四歳年上の貫名崧翁は、若年に木村蘭皐と西双溪に書を学び、青年期に高橋赤水に漢学を、大人になってから矢上快雨に漢詩を学んだ。さらに妻の父である矢野永教に狩野派の画を、後に長崎で日高鉄翁に南画を学び、京都で成功を収めるのである。このように一人の学生が複数の師匠から多分野の文芸を学ぶことは決して珍しいことではなく、それが同時期であっても許されていた。原雀亭が十三歳で守住貫魚に画を学び始めるのと同時期に、喜根井善種に書を学んでもおかしくはない。

『徳島 城と町まの歴史』には御鉄砲組に関する次のような記述がある。「いま、徳島一の夜の盛り場 秋田町は、かつては淡路町と呼ばれた。一丁目西側に坂崎と長浜の両藩士屋敷があったほか、両側には御鉄砲組屋敷がずつと続いていた。」

「秋田町に隣接する西富田地区の鷹匠町・大道・幟町・弓町の付近は御弓や幟指しの集団以外にも、持筒や御鉄砲組が配置されていた。」

「徳島藩では城下町の防備のため、大道付近に八組・佐古に十五組・大安寺に三組・大岡方面に五組と、合計三十一組の御鉄砲組を周辺部に配置した。」

この他に天保時代の徳島の古地図を見ると、徳島城の北側では、明王寺の前に一組、万福寺の前に二組、山王神社（現在の日枝神社）の前に二組というように分置されている。また、『徳島藩士譜』下巻には「鉄砲の者二十人、杖突一人、計二十一人を以て一組とし、安政の頃には徳島三十組、洲本六組あった。其の他岩屋鉄砲、海部鉄砲があった。」との記載がある。ここから考えると徳島城下だけで約六百人の銃卒がいて、その家族を合わせれば、御鉄砲組関連だけで数千人の人達が徳島城下に住んでいたことに



なる。「杖突」とは、銃卒たちを指図監督する人物で、給料も少し高く、土地も平役の二倍が支給された。御鉄砲組の「年寄役」とはこの「杖突」のことで、さらに組間の調整や教育も行なう存在だったのではないかとと思われる。

これらの情報をまとめると、徳島の御鉄砲組の半数は眉山の北側の佐古地区に、並んで置かれて徳島城下の西側を守り、徳島城下の南側を守る八組の御鉄砲組は、現在の秋田町通りの両側およびそれに隣接する西富田地区、つまり眉山の東側と秋田町通りに挟まれた幅数百m四方の地域内に分置され、それとは少し離れた徳島城の北側の興源寺の周辺の三箇所・・・

現在の助任本町六丁目・吉野本町五丁目・中前川町二丁目に計五組が分置されていたのである。地図内の斜線で示した部分が御鉄砲組の住宅である。改めて考えると、守住貫魚は「徳島秋田町の生まれで、徳島藩の銃手庄野延知の子」であるから、まさしく秋田町の御鉄砲組屋敷の生まれである。原鵬雲も「秋田町の銃卒」であったから、やはり同じ地区に住んでいた。貫魚の友人の佐香貫古は「徳島富田幟町の生まれで家は藩の銃卒」である。貫魚門人の森魚測は「家は代々藩の鉄砲鍛冶を務め、古物町（現在の南新町）に住んだ」人である。町儒者の辻蘭室⁵³は徳島富田の銃卒の家に生まれ、京都で学んだ後に東船場で私塾を開き門弟数百人を指導した。喜根井家も代々御鉄砲組で、善種は下助任村に生まれ育ち、後に御鉄砲組の年寄役になって生地近くに多少の土地を拝領して集団をまとめたのである。明治初期に喜根井家の子孫が住んでいた場所がおそらくは善種の拝領した場所である。ここは城の北側の三箇所御鉄砲組の中間ぐらいの位置にあり、これらの組の調整を行なったり集会を開くにはもってこいの場所である。ここに登場した六家はすべて徳島城下の鉄砲集団であって結束は固く、書画技術を伝え合い、難しい文献を読解しさらに作成する能力も向上させただろう。

鎖国が安定している平和な期間は、武士の理想的な姿はあくまでも伝統的な刀や弓の個人技や騎馬武者であり、集団戦法の足軽である御鉄砲組は藩主の狩猟随行や百姓一揆対策の仕事が主で、藩内では一段下に見られる存在であった。しかし十九世紀初頭以降のロシア・イギリス・アメリカなど西欧諸国の日本への度重なる開国干渉の中で、西洋の優れた新型銃や大砲の情報（長崎経由で日本に入って侵略の危機感が増してくると、御鉄砲組や持筒（大砲手）は急速に西洋文明に関心を持たざるをえない状況になった。文化三年（一八〇六）に幕府は外国船来航の際の取り扱いを諸大名に司令し、沿岸諸藩の防備を厳しくした。そのため文化五年（一八〇八）には徳島藩の中老 集堂勇左衛門⁵⁴が江戸の兵学者 佐藤信測⁵⁵を迎え、鉄砲・

大砲の改良や自走火船の実験を行なった。寛政三（一七九一）〜九三（一八二一）の間は集堂勇左衛門が御鉄砲組頭だったから喜根井周右衛門の直属の上司であったわけだし、善種は寛政九年（一七九七）から父の職を継いでいるから佐藤信測の直接指導も受けたはずである。信測は徳島において『海防策』『西洋列国史略』などを著しているが、文筆に長けた善種がこれらの著書を読み、西洋文明に目を開かれた可能性がある。集堂らの先進的な試みは、時代の動きを理解していなかった徳島藩の保守派に阻まれて一旦は頓挫するが、文化十年（一八一三）、善種がわずか三十二歳で御鉄砲組の年寄役に拔擢されたのも、実際の砲術革新は急激に進行していたから、それには徳島藩の伝統的な経験・知識だけでは対応できず、様々な新刊の戦術書・砲術書を読んで研究できる優秀な頭脳が必要になったからであろう。

文政八年（一八二五）に幕府から異国船打払令が発令され、天保二年（一八三一）には長崎の高島秋帆⁵⁶がオランダからゲベル銃⁵⁷を輸入し始め、西洋流砲術の研究から、銃隊運用を中心とする新しい集団戦法である「高島流」を興す。やがてアヘン戦争（一八四〇〜四二）以後の内外の動乱の中で高島流は全国に広まり、さらに性能の良い新型の銃や大砲が入ってくると、御鉄砲組や持筒が戦闘の主役となり、徳島藩内でもようやく理解が進んで彼らを重視するようになった。この時期に優秀な御鉄砲組の年寄役である善種は大活躍し、責任は一層増したであろう。写真や動画のないこの時代に、詳細な鉄砲の構造・使用方法などを図示するための絵画技術は極めて重要だった。守住貫魚の生まれた文化五年（一八〇八）は佐藤信測が徳島で新しい砲術の指導をしていた年である。鉄砲集団は仲間内から画師を育てる必要が生じ、その延長に画師としての貫魚や原鵬雲らの存在がある。

徳島では特産の藍染料の薬を製造する過程で広大な藍寝床が必要だったが、この床下には煙硝（硝酸カリウム）が含まれ火薬製造には恵まれていた。火薬を増産する中では化学との接近があり、また弾道を計算したり、

部品の精度を上げる中では数学・物理学への接近があつて、集団の知的レベルは急速に高まっていた。そういえば、優秀な徳島藩医となつて『亜墨竹枝』を著し種痘法を普及させた井上春洋⁸⁸も、生まれは淡路の銃隊長の家であつた。

この時期に千金の貯蓄を持つ喜根井家であるから、遺影としての肖像画を作るに当たっては多額の謝金が揮毫者に支払われたはずである。養嗣子の文行が肖像画揮毫を依頼する際には、善種に書を熱心に学んでいた多くの若き門下生の中で、画技の高い、鉄砲集団としても期待をかける人物を選定したのではないだろうか。その者に偉大な画師になる為の奨学金の意味で多額の謝金を渡すことは、「指導に飽くことなき」極めて熱心な教育者であつた善種の遺志を、最も有効に実現する道であつた。

近世絵画史の専門家である本学の須藤茂樹准教授によれば、この肖像画は最初に守住貫魚に依頼が来て、多忙な貫魚がそれを、門下の若き俊英であり、なおかつ喜根井善種と昵懇であつた原雀亭に任せた可能性もあるという。当時は、著名な画師が優秀な門下に仕事を任すことはよく行なわれていたそうである。貫魚と晤室は同年齢で、両名とも既に藩内で活躍中であつて互いを認め合い、仮に貫魚の若い門下が肖像画を代筆するとしても、それに賛を施す晤室が特にクレームをつけることはなかった。

いずれにしてもこの謝金を受け取つた原雀亭は、それを高価な絵具に換え、さらに画技の修行に励みめきめきと腕を上げただろう。同時に、門下二千人の著名書家の素晴らしい遺影を、わずか十六歳で描いた天才画師として名を上げることもなつた。そしてそれが安政一年（一八五四）二十歳の「大森羽田出陣絵巻」揮毫（この時は「原一介」の名で記録）や、文久二年（一八六二）二十八歳の遣欧使節随行（この時は主に「原覚蔵」の名で記録）につながり、西洋画を日本に持ち込んだ初期の画人として美術史に残ることとなつたのである。原雀亭にとつて、この肖像画は出世のチャンスを作つた作品だといえよう。



原鵬雲 墓碑
徳島市沖浜町 遵敬寺



前面

明治十二年
原鵬雲居士墓
八月一日没



左側面

鵬雲母 惠善大姉
同人妻 古登大姉



右側面

鵬雲嫡子 一幻童子
明治元年八月六日
同二男 紅蓮童子
明治三年七月十二日

原鵬雲の若年の雅号が「雀亭」であることがわかると、万延一年（一八六〇）の夏に般若院で行なわれた斎藤春溪^⑤の追悼書画展の阿波関係出展者名の中にある「鶴亭」は、二十六歳の原鵬雲である可能性が高くなる。

（『雲城遺稿』五十八頁参照）この時この画師は「戴真王之図」という題の絵を出展している。欧州から帰国後の文久四年（一八六四）三十歳時に描かれた山水図には「鵬雲」の雅号を使用しているの、彼が守住貫魚から「雀亭」の雅号を貰い、それを少なくとも十六歳から二十六歳まで十一年間は使っていたことがわかる。そして渡欧後に、貫魚から海外雄飛を記念して、鳥つながりで、よりスケールの大きな「鵬雲」の新雅号を貰ったものであろう。

現在鵬雲の墓は徳島市沖浜町の遵敬寺にある。秋田町の通りを南につき抜けて踏切を渡り少し進んだところである。墓石の前には原鵬雲の没年月日、左側面には鵬雲の母・妻の戒名、右側面には夭逝した二人の男児の戒名と没年月日が彫られているのみで、詳細は記載されていない。遵敬寺の過去帳は徳島大空襲ですべて焼失している。原家は明治七年（一八七四）の鵬雲の官立広島師範学校就職によって広島に一家転住し、嗣子廣磨^⑥が同九年（一八七六）三月十九日に生まれる。明治十二年（一八七九）に鵬雲が没した後は広島市の誓立寺^⑦に葬られたが、後に遵敬寺に改葬された。

一家は徳島県に戻り、廣磨は成長後に小学校教員となって県内を異動して、終戦後の昭和二十一年（一九四六）十一月十九日に七十一歳の生涯を閉じた。その娘ユタカは教員と結婚して子供が生まれた後、知り合いの仕事を手伝うために一時期家族で大阪に転居するが、空襲に遭って徳島県三好郡三野町に戻り、平成一年（一九八九）四月十三日に八十二歳の生涯を閉じた。その子である廣顯^⑧は極めてピアノ演奏に長けていて、徳島県立池田高等学校で音楽教師として二十七年間在籍した。この間に野球部で葛文也監督が采配を揮って甲子園で活躍し、全国的に同校の知名度が上がった。廣顯は平成十九年（二〇〇七）十二月十三日に七十二歳の生涯を閉じた。

その子史磨^⑨氏は現在、徳島県内の高等学校で数学科教諭として勤務されている。

2 肖像画の技法分析

資料⑤の喜根井善種の顔の描き方の手本の一つになったのは、久保仲輔の描いた柴野栗山の肖像画であろう。守住貫魚がその肖像画の輪郭線を模写した草稿が徳島県立博物館に遺されているが、⑥の顔のしわや目の描き方は⑤と酷似し、人物の表情をよく表現している。平賀源内^⑩とも関係のある漢蘭医久保仲輔には、実態に肉迫しようとする洋画の精神が伝わっていた。その肖像画自体は栗山の後を引き継いで徳島藩儒となった柴野碧海^⑪が所蔵し、それを更に柴野竹斎^⑫が引き継いで、貫魚も見せてもらい模写することが可能だったと思われる。

この当時の遺影として描かれた徳島の肖像画は、その被写体の生前の生活や性格が良く現れるように様々な調度品を画面に入れていることが多い。著名な剣術家であった脇町の武田氏の場合は愛用の刀を配し、農政家で文人でもあった豊岡荔墩^⑬の場合は、愛用の文庫・火鉢・碁盤の前で梅を写す場面を描く。

喜根井善種の肖像画の場合は御鉄砲組なのに鉄砲が一切出てこないのが不思議だが、年寄役の仕事は鉄砲を実際に扱うことより、集団の指揮・砲術研究・教育・外部交渉・事務管理などが主体で、晩年は書道指導の方が忙しかったのだらうし、善種もそれを好んでいたのだと思われる。文机で書き物をしている途中にふと休んで垣間見せた、憂いを含む優しい表情を斜め前から描く構図である。服の立体感、机の木目、机の上の硯や本の表現など、細部にまで気を遣っている。背景のデテールにこだわって臨場感を出そうとする、今日のジブリ映画の手法にも通じるものがあるが、原雀亭はモデルの性格を知り抜いているように思える。これが十六歳の少年の描いた画とは思えないほど素晴らしい。しかし、③の左手の指の極端に

細く弱々しいところ、④の水差しの形がゆがんでいるところ、⑤の顔の耳の形などはデッサンが不十分で、さすがに修業中らしい未熟さも感じさせるのである。

3 『亜墨漂流新話』の挿画をめぐる

さて、ここに面白い絵画資料がある。四国大学図書館凌霄文庫所蔵の写本『亜墨漂流新話』に掲載されている約五十箇所挿画である。この原本『亜墨新話』は天保十五年（一八四四）に作成されたものである。天保十二年（一八四一）に阿波国撫養の初太郎（一八二三～八九）を含む十三名の乗組員の乗った栄寿丸が嵐に逢って太平洋を漂流し、スペイン船に助けられる。彼らはメキシコで降ろされて現地でしばらくホームステイしたり働いたりして、そのうち阿波・紀伊・松山・島原出身の五名だけが帰国する。帰国した初太郎から聞き取った内容を、徳島藩儒前川秋香（一八〇一～五四）らが文章にし、守住貫魚が挿画を入れて本にまとめて藩主に提出した。この抜粋は安政一年（一八五四）に『海外異聞——一名亜墨利加新話』として出版された。原本は昭和二十五年（一九五〇）三月十三日の徳島県立図書館の火災で焼失し、青刷りコピーだけが奇跡的に残った。これを写本の挿画の同じ部分と比較すると、思った以上に異なる表現なので驚いてしまう。写本は複数作成され、現在全国各地に十数程度は残っていると考えられるが、本学の写本もそのひとつである。

原本作成以後にこの写本の挿画を担当したのは、おそらくは守住貫魚門下の画師であり、原鵬雲の可能性もある。既に原鵬雲画とわかっているA・「ラッパ隊手之図」（幕末・明治期に制作）と、B・守住貫魚の『亜墨新話』、C・写本である『亜墨漂流新話』の三者を比較してみた。

Cの画師は、Bの原画を必ずしも忠実に模写してはいない。自分流に描き換えている部分がある。その描き換え後の雰囲気はAと似ているのである。例えばBには顔の動きがあまり感じられず、細面であるが、AとCは

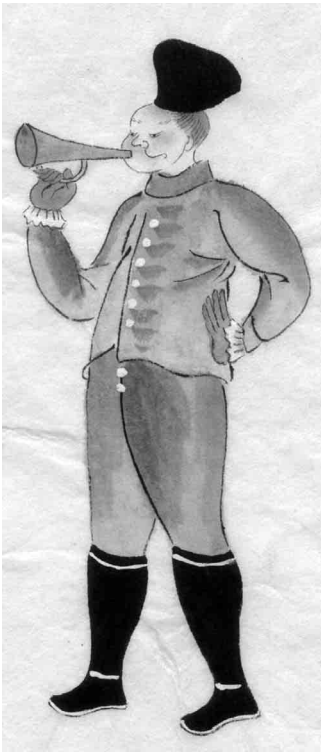
A 「ラッパ隊手之図」 原鵬雲画 高雲外賛 （東福寺美術館蔵）



B 『亜墨新話』 ラッパを吹く兵士 守住貫魚 画（青刷りコピー）（長尾啓太郎氏蔵）



C 『亜墨漂流新話』（写本） ラッパを吹く兵士 （四国大学図書館蔵）



人物の頬が膨らんでラッパに息を吹き込んでいる感じが感じられる。実際にラッパを吹く時には必ずしも頬が膨らむとは限らないが、AとCはラッパを吹く臨場感を出そうと表現を工夫しているようだ。靴の形と足のラインはBの靴は薄く鋭いが、AとCには豊かさ・柔らかさに共通性がある。二の腕の肉付きはBは痩せて直線的であるが、AとCは豊かである。全体的にBは細くすっきりしているが、AとCは丸みを帯びている。これを見る限りではAとCはかなり似ているように思え、Cの挿画を描いた画師に対する興味は増す。Bの描かれた年がアヘン戦争の直後で、日本全体に西洋からの侵略の危機感が増していた時代だけに、鵬雲に西洋への興味関心を抱かせる最初のきっかけになったのは、この写本制作なのではないかと思う。今後この挿画に関しては、詳細な研究を行なう予定である。

六 その後の喜根井家

文政六年（一八二三）の生まれで、養嗣子で三代目の喜根井文行は、善種を継いで御鉄砲組年寄役の仕事を続けて四十六歳で明治維新を迎え、明治十六年（一八八三）に六十一歳の生涯を閉じる。喜根井家四代目を継いだのは次男の文五郎（一八五二—一九〇〇）であった。幕末から明治にかけて激動の日本を生きた彼らの人生の詳細は不明であるが、文五郎は優秀な一人の男子を遺した。それが喜根井家五代目の陽次郎（一八七〇—一九四〇）である。

喜根井恒児氏の熱心な調査から、善種の曾孫に当たるこの陽次郎の自筆履歴書が徳島県立脇町高等学校に残っていることがわかり、それを調べることで詳細がわかってきた。この履歴書の文字は達筆で、やはり善種以来の家伝の書法の影響を受けているだろう。文字の結構や章法に喜根井周右衛門墓碑との共通点を多く感じる。

明治三年（一八七〇）十月二十八日生まれ、陽次郎の原籍は「徳島市下助任村字門除五百五十四番地ノ一」（現在の中吉野町一丁目十三番地、鳴

門教育大学附属中学校の南隣）である。同十七年（一八八四）七月には徳島尋常中学校⁶⁴に入学した。この中学校の初代校長を明治十二—十四年（一八七九—八二）の間勤めて校風の基礎を作ったのは、岡本晤室の子である斯文⁶⁵である。ここでの同級生には徳島県那賀郡柳瀬村出身の喜田貞吉⁶⁶、十歳で入学した数学の秀才 林鶴一⁶⁷がいる。陽次郎は同二十二年（一八八九）七月にここを卒業して、九月には大阪から京都に移ったばかりの第三高等学校⁶⁸に入学した。この頃、第三高等学校では守住勇魚が画学を教えていたから、陽次郎は勇魚から間接的に原鵬雲の教えを受けたことになる。

さらに陽次郎は明治二十七年（一八九四）九月に、帝国大学理科大学⁶⁹（今日の東大理学部）化学科に二十五歳で入学した。当時も徳島から県外の大都市に子供を進学させることは多額の資金が必要だったので、善種の潤沢な遺産の影響はこの時期まではなんとか続いていたものと思われる。恒児氏がかつて父親から聞いた情報では、陽次郎の入学年に徳島から帝国大学に入学したのは彼一人だったそうで、彼は徳島の期待を担う優秀な人材であった。だから陽次郎を東京でバックアップした徳島県人もいたはずである。

前年の明治二十六年（一八九三）には喜田貞吉が二十三歳で帝国大学文科大学国史科に入学し、徳島市出身の鳥居龍蔵⁷⁰が二十四歳で帝国大学理科大学人類学教室の坪井正五郎⁷¹の援助でその標本整理係となって人類学者としての道を歩み始める。喜田貞吉は陽次郎とは徳島尋常中学校の同級であり、高等学校も大学も同窓である。陽次郎と鳥居龍蔵は同年齢である。彼ら三人は互いに知り合いだった。そして東京にあって喜田と鳥居の学問のための貴重資料貸借などの便宜を図ったのは、同郷の小杉楳邨⁷²と、旧徳島藩主で侯爵となった蜂須賀茂韶⁷³である。楳邨は明治七年（一八七四）に東京に出て太政官修史館で勤務し、同十五年（一八八二）には東京大学古典講習科で教え始め、文部省や宮内庁に広い人脈を有した。守住貫

歴 履 書

徳島縣平氏

正七位 喜根井陽次郎

明治三年十月二十八日生

原籍徳島市下助任村字門除五百五十四番地一
現任所 徳島縣美馬郡脇町本町四百五十六番二

年号于支月日	任 免 賞 罰 事 故	官 衛
明治七年七月	徳島縣立尋常中學校に入學ス	
同五年七月	同校中學校全科卒業ス	徳島縣立尋常中學校
同五年九月	元第参高等中學校に入學ス	
同七年七月	同校高等中學校卒業ス	元第参高等中學校
同七年九月	帝國大學理科大学ニ入學ス	
同八年五月	家事都合ヨリ帝國大學ヲ退學ス	

喜 根 井 氏

徳島縣立協町中學校

魚が同九年（一八七六）に東京に出た時にはしばらく小杉家に同居させてもらうほど親しい間柄で、同二十三年（一八九〇）に貫魚が帝室技芸員に選出されるのにも、楳邨の推薦が大きき力となった。楳邨と原鵬雲は新暦で言えば同年の一八三五年の生まれで、貫魚と昵懇な楳邨が貫魚門下の俊英である鵬雲を知らないはずはない。また喜根井家菩提寺の般若院の墓地には楳邨揮毫の墓碑も見られるし、書道に堪能な楳邨が著名書家である喜根井善種を知らないはずはない。蜂須賀茂韶は維新後英国へ留学し、同二十三年（一八九〇）に東京府知事・東京市長を兼務し、同二十九年（一八九六）には文部大臣に就任し、終生枢密院顧問となった。

徳島出身で、シーボルト（二七九六—一八六六）門下の西洋医高良齋（一七九九—一八四六）の長男であった高雲外^⑤は、徳島洋学校で洋学を教え、廃藩置県後に上京して太政官左院・内務省・農商務省などに奉職している。英語教育に熱心で第三高等中学校設立にも影響を与えた弟の高良^⑥も明治十三—二十五年（一八八〇—九二）の間は外務省に勤務し、退職後も東京で欧米との良好な関係維持に努めた。高雲外と原鵬雲は徳島洋学校での同僚で、既述のA画のように鵬雲画の賛を高雲外が書いている。雲外はまさに陽次郎が退学した明治二十八年（一八九五）五月に没するが、良二も兄から鵬雲の話は聞き、鵬雲と関係ある喜根井家の子息が徳島から上京したことも噂には聞いていただろう。また、陽次郎が徳島尋常中学校に入學直前まで四年間校長を勤めた新居湘香^⑦は、後の明治二三—三十六年（一八九〇—一九〇三）には東京府庁や大蔵省などで勤務している。これらの人々が東京で学ぶ陽次郎の学問の進展のために尽力をした可能性がある。しかし明治三年（一八七〇）には下級士族の銃卒である喜根井家は卒族となり、さらに同五年（一八七二）には平民に組み入れられたから、わずかにあった藩士としての収入を失った。書塾も個人の技能が伴わなければ続けられないから、その後おそらくは父親の文五郎が慣れない別な仕事に手を出して、徐々に立ち行かなくなったのだと思われる。明治三十一年（一



学生時代の陽次郎



広島忠海中教諭の陽次郎



脇町中学校化学教室で生徒達と写る陽次郎（右下端）
机の上に様々な実験道具が置かれている。
（喜根井家蔵）

八九八）から記載が始まる旧喜根井家の番地の土地台帳の所有者欄には既に別な家の名があるので、さすがの善種の遺産も底をつき徳島市中心部の良い場所にあった土地家屋を売らざるを得ない状況になったのだろう。陽次郎が帝大在学中に遂に学資不足で学問を続けることが不可能になる。彼の履歴書には「家事都合ニヨリ帝国大学を退学ス」と記載されている。学者としての成功を夢見ていた陽次郎だったが仕方なく、明治二十八年（一八九五）帝大理科大学をわずか九ヶ月で中退し、旧制中学校で化学・物理・数学を教える教師になった。

徳島は江戸末期から洋学の先進地であり、中央から有名学者を招聘したり、長崎に藩士を留学させて西洋医学や語学を学ばせていたから、優秀な人材を多く輩出し、また彼らが教育者となって次世代を育てていた。徳島尋常中学校では阿部有

清^⑦・武田丑太郎^⑧が数学・物理学を教え、樟脳製造法の特許をとった有持^⑨・小出寿之太^⑩が化学を教えていた。第三高等中学校でも徳島出身の加田綱三郎^⑪・小出寿之太^⑫が数学を教えていた。陽次郎は彼らの教え子である。また、陽次郎の実家のすぐ近所の出身である長井長義^⑬が化学・薬学分野で世界的な業績をあげ、明治十八年（一八八五）以降、東京大学理学部化学科（同十九年からは帝国大学理科大学化学科）で教授、医学部でも薬化学を教えて活躍していた。わずか九ヶ月間の指導でも、憧れの郷土の先輩に学ぶ期間は陽次郎にとっては夢のような日々だったろう。そしてそれはその後の彼の人生にも大きなプラスになった。しかも、陽次郎は善種以来の家伝の書道技術に長けており、日常生活の多くを毛筆で書くこの時代に字の上手なことは大きな武器になった。陽次郎は徳島の地域性が育てた素晴らしい人材の一人だったのである。

当時の中学校教師の転勤は全国区で行なわれていたし、洋学である理系科目を幅広く教えられる教員は貴重だったから、陽次郎は各地からその指導を請われた。徳島尋常中学校↓熊本県の沓々響^⑭↓奈良師範学校^⑮↓広島県立忠海中学校^⑯↓愛知県田原町立中学成章館^⑰↓徳島県脇町中学校^⑱と転勤した。奈良では小中学校教員乙種講習科講師を務めているので、今日でいえば教員養成大学の講師役であるし、また奈良師範・忠海・脇町では舎監も兼任し寄宿舎での生徒指導に当たっている。広島忠海中で教えた生徒の一人に池田勇人^⑲がいる。文部省の夏期講習等で時折新情報を学びながら教師としての力を磨き、退職まで管理職には就かず現場で授業する教師の仕事を全うし、多くの若者の未来を切り開いた。広島で勤務中の大正五年（一九一六）四十七歳時には既に功績を認められて、宮内省から正七位に叙せられている。

退職後は徳島で過ごす、昭和七年（一九三二）妻チヨに先立たれ、同十一年（一九三五）に八十五歳の母ムメを看取り、同十四年（一九三九）八月から最晩年の一年三ヶ月間程は息子の転住に同行して福岡県門司市で

余生を送り、同十五年（一九四〇）十一月二十二日、太平洋戦争勃発一年前に七十一歳の生涯を閉じた。

陽次郎が明治二十九年（一八九六）に教員として初めて勤務した母校の徳島尋常中学校では、同じ年に岡本晤室の孫（養嗣子）にあたる同年齢の岡本対南^⑳が同僚として漢文を教え始めている。また陽次郎がそこで教員生活を終えた脇町中学校は後に徳島県立脇町高等学校となり、平成時代になってから原鵬雲の子孫の史磨氏がそこで数学を教えている。肖像画軸によって結ばれた縁は時を超えて今も続いている。

同窓生の喜田貞吉や林鶴一は帝大卒業後に更に帝大大学院に進学し、後に京都帝大・東北帝大などで教鞭を執り、歴史に残る学者となっている。経済的理由のみで帝大中退を余儀なくされた陽次郎は、晩年まで忸怩たる思いを抱いていたそうである。しかし、近代初期の化学・物理・数学の教師として全国各地で多くの若者を育てる仕事に徹し、日本の近代化に貢献した陽次郎の人生も、高く評価されてよいだろう。熱心な教育者である喜根井善種の心を最も濃厚に受け継いだのは、この陽次郎であった。

陽次郎の後年の俸給や年金は高額である。例えば広島県忠海中学校教諭として明治三十八〜大正六年に四十歳代の陽次郎が受け取っていた月給は五十円以上あり、年棒は七百〜八百円である。明治四十二年（一九〇九）の岐阜県の小学校教諭の平均月給が十六円、大正五年（一九一六）の日本の都市部労働者の平均月給が約二十八円であるから、陽次郎がかなり高級取りの部類に属するのがわかる。最晩年に門司市で受け取っていた年金も地域住民の中ではひととき高額だったという。これによって喜根井家の家計は完全に持ち直した。考えてみればこれは徳中・三高・帝大での修学の御陰とも言え、善種の遺産の影響はここにきて再び花開いたわけである。

陽次郎は徳島県の三木家からチヨを娶って六代目の正一（一九〇六〜八三）が生まれる。正一は父の転勤に伴って各地で学んだ後、脇町中学校から松山高等商業学校^㉑に進学、卒業した。代用教員を二年間ほど勤めてか

ら、野間清司が設立した講談社^⑨に就職する。しかし幼少期から海が大好きだった正一は間もなく瀬戸内商船^⑩に転職し、その社長の姪で、愛媛県今治市大島出身の野間光子^⑪（のまてるこ）と結婚する。光子は衆議院議員野間豊五郎^⑫の孫娘であり、名家の令嬢としての教育を受けて、深い教養と強い精神力を身につけた女性だった。正一は昭和十四年（一九三九）には東亜海運株式会社^⑬に転職して經理の専門家として勤務し、福岡県門司市に一家転住した。彼には肘に軽い障害があったために兵役に就くことはなく、戦時中も門司にいた。

昭和二十年（一九四五）の八月八日に起こった福岡県の八幡空襲^⑭では、正一の外出中に喜根井家に焼夷弾が落ち家は燃え始めたが、妻光子が気丈にも防空壕から飛び出して必死で火を消しボヤで済んだ。この時に家が全焼していれば、善種の肖像画軸も今この世に存在しないことになる。それでも、もつとひどい空襲だった徳島に置かれていたならば、まず間違いないこの世には残っていない。さらに言えば、長崎原爆^⑮は当初は北九州の小倉陸軍造兵廠に落とされる予定だったが、当日北九州は曇っていた上に日本軍の攻撃を受けたために、予定を変更して長崎に落とされた。もし当日、北九州に落とされていればやはりこの肖像画は残っていないし、喜根井家も滅びていた可能性が高い。まさしく戦災をすり抜けて奇跡的に残った作品なのである。

戦後に東亜海運株式会社は閉鎖機関令で特別清算したため、正一は門司の採石会社に再就職して働き、五人の子供にも恵まれ、昭和五十八年（一九八三）二月二日、七十七歳の生涯を閉じた。

現在の七代目当主は正一・光子夫妻の長男である隆彦氏で、恒児氏は次男にあたる。光子氏は、今年平成二十六年（二〇一四）四月三十日に北九州市門司区のご自宅で九十九歳の天寿を全うされた。今回の喜根井善種の肖像画軸と墓碑調査結果の概要は、亡くなる直前に恒児氏から伝えられ、たいへん喜んでいただいたとのことである。私の調査結果がそれに間に

昭和三十年頃の正一と光子



合ったのも奇跡的であるし、私が北九州市内の高校で一年間勤務した経験があり、私の妻が北九州市出身なのも全く不思議な御縁である。

おわりに

それにしても我々の人生とは、そして歴史とは、なんとという奇遇の連続で作られていくものだろうか。たった一つの人の出会いから、そして一本の掛軸や数基の墓碑から、これまではつきりしていなかった喜根井家の歴史がかなり明確になってきた。また幕末の徳島に喜根井善種や曾根維石という素晴らしい書の指導者が存在したということがわかり、近世徳島の書道文化の解明もまた一歩進んだ。般若院や遵敬寺の墓碑も喜根井家の肖像画軸も、戦争や火災の危険をすり抜けて奇跡的に残った大切な文化財であることが証明され、また原鵬雲の十六歳時の雅号は「銕砲」であり、既にかんりの画技の持ち主であったことがわかった。そして「鉄砲」という要



平成16年、喜根井光子と5人の子
左から鳩美子・隆彦・宰・光子・泰子・恒児

素を主軸に結ばれた喜根井善種肖像画の縁は、近世末期から近代初期にかけて日本が西洋文明を導入して近代化していく動きと連動し、先進的な徳島の学芸環境の中で、後々まで微妙な影響を与え続けている。

これらによって、関係する各家の皆様が自らの先祖に対する誇りを持ち、さらに自らの生命が人の絆によって成り立つ奇跡の存在であることを知り、深い歴史観を抱くようになっていただければ、その仕事や生活の質は今以上に高度なものになるだろう。人々の意識の微妙な進化は、地域全体にも必ず好影響を与えていくものである。歴史に埋もれた事象も資料を丁寧に探索し考察することで徐々に掘り出され、そのことは少しずつではあるが社会を善導していく。学問の力の素晴らしさというのは、このような点にこそあると思っている。

多くの貴重資料が空襲で焼けたとはいえ、今回のような例もあるし、当時の文書や碑文の中に、喜根井善種・曾根維石・原鵬雲らの事跡が発見されていく可能性はまだある。今後も地道に地域の歴史資料分析を続けていこうと思う。

なお、これまで述べてきた調査内容をもとに、喜根井家・岡本晤室・原鵬雲に関連する人々の動きを中心に、徳島・日本・世界の動きと関連させて年譜を作成し、稿末に四頁にわたって掲載する。

今回の研究では、喜根井家・曾根家・原家の皆様、長尾啓太郎氏、徳島市寺町の般若院、徳島市沖浜町の遵敬寺、徳島市二軒屋町の観潮院、徳島県立近代美術館の江川佳秀氏、徳島県立博物館、徳島市立徳島城博物館、美馬郡つるぎ町の東福寺美術館、徳島市役所、美馬市役所、徳島県立城南高等学校、徳島県立脇町高等学校、東京大学史料編纂所、四国大学図書館、四国大学文学部の富久和代教授・須藤茂樹准教授などの親切な協力を得た。ここに紙面を借りて御礼を申し上げる。ただ、まだまだ不明な点も多いので、情報をお持ちの先学諸氏の御指導を期待するものである。

なお、本論文は、四国大学が平成二十四年から実施している学際的・総

合的研究「阿波学事始め」の一部であるとともに、JSPS科研費25370122の助成を受けた研究成果の一部でもある。

注

(1) 貫名松翁(ぬきなすう) 安永七(一七七八)―一八六三 八十六歳。

徳島弓町の生まれ。父は徳島藩の家老稲田淡路守の家臣で小笠原流礼法の指南役だった。名は苞、字は子善・君茂。通称は次郎。別号は海仙・海客・海屋・海叟・須静堂・三絨堂。本姓は吉井だが、後に近江出身の先祖の姓「貫名」に改姓した。舅の矢野栄教について狩野派の画法を学んだが、後に長崎に行き日高鉄翁に師事してついに一家をなし、南画壇に君臨した。書は初め木村蘭皐に青蓮院流の書を学び次いで西双溪に米芾流を学び、藩校で漢学を学ぶ。寛政の初め、那賀郡黒津地村(阿南市)で医業を開き、隣村の高橋赤水に漢学を学ぶ。高野山で空海の書を見て悟るところがあり、大阪に出て経学を懷徳堂に学び、矢上快雨に詩文を学んだ。後に京都岡崎に住み、須静堂を開いて漢学・儒学・南画・書を指導した。特に書では空海・道風のほかに晋唐の古法を研究して気品に富む独特の書風を打ち出し、幕末の唐様の代表者となった。諸国を周遊して見聞を広げ多くの文人と交わった。

(2) 徳島ビジネスチャレンジメッセ：「徳島ニュービジネス協議会」主催によって平成九年(一九九七)から始まった「徳島ニュービジネスメッセ」が、平成十二年(二〇〇〇)に徳島県工業展と合体して「徳島ビジネスチャレンジメッセ」と改称し、徳島市の「アスティ徳島」というイベント会場を舞台に毎年一回、三日間にわたって行なわれる展示会。企業・団体がそれぞれ数mのブースを割り当てられて、その中で企業活動の紹介をし、一般にも公開して参加者同士の商談をすることができ。初回の出展企業は百二十五社、総来場者数一万四千人。併せて優秀なビジネスプランを表彰する「徳島ニュービジネス大賞」を実施し、最優秀賞の企業に賞金一千万円を贈呈するという奇抜さによって全国的に有名となった。行政や企業の支援活動も広範囲にわたるようになり、現在の会員は個人会員も合わせて約百九十社、来場者数は三万二千人を超える。この催しを通じて業務提携や起業を実現したケースも多く、徳島の経済

活性化に貢献している。

- (3) 喜根井善種：『阿波人物志』には次のような情報しか掲載されておらず、詳しいことはこれまでほとんど不明であった。「天明二—嘉永二（一七八二—一八四九）、書家。字は善種、通称は為蔵。徳島市の人。嘉永二年八月十四日没。年六十八。」善種の読みは「ぜんしゅ」と読むか「よしたね」と読むか不明であるが、当時の儒学者の諱を音読みすることが多いので「ぜんしゅ」と読んでおく。養嗣子の文行もそれに倣い「ぶんこう」と読む。

- (4) 岡本晤室。文化五—明治十四（一八〇八—一八八二）七十四歳。

徳島富田の生まれ。藩儒岡本遜斎の子。名は知充、字は叔達、通称は堅三郎、別号は晤叟・樸蔭・近南。幼少の頃から父について学び、家学を受け、長じて柴野碧海の門に入って教えを受ける。安政四年（一八五七）江戸長久館教授となる。明治二年（一八六九）に西の丸長久館が再置された時、一等教授に登用され、漢学的首座教授となる。



岡本晤室叟之碑
徳島市二軒屋町
観潮院

- (5) 恭儉：うやうやしく慎み深いこと。
(6) 適媚：筆力が強く美しいこと。
(7) 教誨：教えさすこと。
(8) 篤行：誠実な行動。
(9) 妙技：妙は妙と同義。妙なる技。この場合は素晴らしい書道の技術。
(10) 考：父親。
(11) 恭謹：うやうやしくつつしみ深いこと。
(12) 年寄役：年寄役には、中老の上位である管理部門の職種もあるが、喜根井氏の名が『徳島藩士譜』に登場しないことから、この場合は小集団の上位を意味する「年寄」である。「小頭」とも「杖突」ともいい、約二十名の御鉄砲組のメンバーのまとめ役で給料は平役よりも一石多い程度、

拝領の土地は二倍という中間管理職といつてよい。様々な交渉事や砲術研究に必要な文書を読み書きする能力や学問の高さを買われて、善種が三十二歳で抜擢され、生涯それを勤めあげて養嗣子の文行も世襲したのである。

- (13) 致仕：仕事を辞めること。

- (14) 曾根維石？—文化十（？—一八一三）。徳島藩の儒者で書家。詳細は不明。現在も曾根家は徳島市内に子孫が在住。墓石は喜根井家墓地の三m南側に存在し、建設者名の中に「曾根維石」の記載があったので調査したところ、現在、先祖の名を受け継ぐ子孫の一人が東京都中野区で心療内科の医師として「曾根クリニック」を開業していることが判明し、連絡をとることができた。先代曾根維石の書作品等は、残念ながら空襲の折にすべて焼失したとのことである。



- (15) 詳覆：細かく調べる。
(16) 輻湊：車の輻が轂に集まる意。転じて四方から寄り集まり、一箇所に集中すること。
(17) 職を襲う：職を継ぐ。
(18) 家道：家庭内で守られるべき道德、家政、生計。この場合は生計を指す。
(19) 蕭然：がらんとしたものの寂しいさま。
(20) 千金：この場合の一金は一分金。近世は時代によって物価変動が大きいので、お金を現代の価値に換えるのは難しいが、木崎愛吉の『篠崎小竹』に次のような記述がある。
「天保十一年（一八四〇）、六十歳の時、板倉節山侯送序の中に、その家の歳入二百金、自ら衣食するところ二十分の一に過ぎず、その余りを以て遍ねく家事を弁じ、稍贏余を存じて、吉凶の用に備ふとある。天保に二百金、晩年に五百金と積っても、収入の額よりも、出入の切り盛りに

巧なところが、小竹の富を唱はれるやうになった所以であらう。」

喜根井善種の一歳年上の篠崎小竹（注30参照）は大阪の儒者の中で最も裕福と言われた人物で、特にその書は人気があった。当時の大阪で節約して暮らす年間の大人一人分の衣食はわずか十金で可能だったわけで、従来の説なども参考にして、ここでは一金を現代の五万円程度と考えておくことにする。すると二百金は約一千万円、五百金は約二千五百万円となり、裕福で羨望の的となる儒者の収入や貯金として妥当な金額と思われる。そして善種は小竹晩年の貯蓄の二倍の額を持っていたことになり、現代の約五千万円となる。大阪よりも都市規模の小さな徳島にあって、この金額を書道教授によって蓄積した彼の、書家としての力量はかなりのものと考えなければならぬ。

(21) 敝衣：破れた服。着るものにお金を掛けないこと。

(22) 疏食：粗末な食事。『論語』に「子曰、飯疏食飲水、曲肱而枕之、樂亦在其中矣、不義而富且貴、於我如浮雲。」（子曰く、疏食を飯い、水を飲み、肱を曲げてこれを枕とす。楽しみ亦その中にあり。不義にして富み且つ貴きは、我に於いて浮雲の如し。）とあることを踏まえた言葉。粗末な食事をし、水を飲み、肱を曲げて枕にして眠る。自分に合った生活の中で、道を踏み外さず伸び伸びと生きることこそ楽しみがあり、人の本来の生き方なのだということ。

(23) 甘美：味が程よく甘くてうまいこと。また、心地よくうつとりとした気持ちにさせること。高級で贅沢なことを指す。

(24) 御…とは音符「午（きね・杵）」に「口（人）」を加えた形で、人が杵で土をつき固めならす様を意味。のちに「イ」と「止（足）」を加え、馬を馴らし進ませることを意味した。この場合は、そのものに触れたり扱うことを指す。

(25) 天…若くして亡くなる。

(26) 姪：現在は兄弟姉妹の生んだ女子を指すが、本来は兄弟の子を指す漢字で男女共に使った。ここでは「おい」と読む。甥は現在は兄弟姉妹の生んだ男子を指すが、本来は姉妹の子を指す。

(27) 嫡男：正妻が産んだ、跡継ぎになる予定の男子。

(28) 柴野栗山 元文一〜文化四（一七三六〜一八〇七）七十一歳。

讃岐三木郡牟礼村の生まれ。柴野安枕の長男。名は邦彦、字は彦輔、別号は古愚軒。初め高松藩の後藤芝山に学び、後に江戸に行き昌平黌に入る。明和二年（一七六五）、京都で国学を高橋図南に学ぶ。この間、西依

成斎・赤松滄洲・皆川淇園らと交流し、三白社を興し詩文を盛んにした。業成つて徳島藩に仕え儒官となったが、のち辞して京都に移つて家塾を開くと共に専ら朱子学を唱えた。老中松平定信に抜擢されて昌平黌教官となり、朱子学を復興するため「寛政異学の禁」を行なった。寛政の三博士。

(29) 村瀬栲亭 延享三〜文政一（一七四六〜一八一八）七十三歳。

京都の生まれ。父周節は徳島出身の医師。名は之熙、字は君積、通称は嘉右衛門、別号は神洲。幼時から才能に秀で、父から医学を学び武田梅龍に儒学を学ぶ。一時医を業とするが後に秋田藩に招かれて藩儒となり、致仕後は京都に家塾を開いて教授した。博学で考証を重んじ、詩文、書画にも長じた。書は蘇軾や明人を良く学んだ。多くの著書がある。

(30) 篠崎小竹 天明一〜嘉永四（一七八一〜一八五二）七十一歳。

豊後杵築の医者、加藤周貞（吉翁）が大阪に開業してから生まれた子。名は弼、字は承弼。九歳で篠崎三島の門に入り、才を愛されて養子となり、家学である古文辞学を研鑽した。寛政十一年（一七九九）、十九歳で江戸に行き数ヶ月間 尾藤二洲に学び、さらに文化五年（一八〇八）、二十八歳で古賀精里に半年間 朱子学を学んで大阪に帰って養父に代わつて子弟を教育した。門下は千五百人を超え、大阪在勤の大名で教えを請う者も多かった。淡路稲田家に教授として出向き、徳島藩に大きな影響を与えた。書家・蔵書家としても知られ、特にその書は人気があった。円満な性格で交流が広く頼山陽・柴野碧海とは特に親しかった。

(31) 篠崎三島 元文一〜文化十（一七三六〜一八一三）七十六歳。

大阪の生まれ。名は応道、字は安道、号は三島・郁洲。通称は伊予屋長兵衛。父 長兵衛が伊予から大阪に出て紙屋を営んでいた。三島はその次男で、父の隠居後二代目長兵衛を名乗った。但徠門人の菅甘谷、その弟子の兄楽郊に儒学・詩文を、麻田剛正に天文を学んだ。大阪の町人学者の例にもれず、よく家業にも精励し商いは繁盛したが、安永五年（一七七六）、家業をたたみ土佐堀の隠居所に私塾梅花社を開いた。講義の傍ら月に三回詩会を開き、名のある文人達が参加した。片山北海らの混沌社にも参加した。後年、徳島藩筆頭家老稲田家の賓師として、嗣子小竹を連れて毎年淡路島を訪れた。

(32) 頼山陽 安永九〜天保三（一七八〇〜一八三二）五十三歳。

広島藩儒 頼春水の子として大阪江戸堀で生まれる。名は襄、字は子成。幼時から詩文に秀で史書を好んだ。十四歳で柴野栗山の言に感じて朱子

の『通鑑綱目』を読み、十八歳で江戸に出て尾藤二洲に経学・史学を学び、広島に帰って『日本外史』を著わした。これは南朝正当論を説き尊王派の思想の拠り所となって維新に大きな影響を与えた。のち京都に塾を開いて詩壇の中心人物となり、全国各地を周遊し名所旧跡などを訪れては、多くの人と交流し詩を作り書作品を残した。豊前の耶馬溪の命名者としても有名。書は初め董其昌を学んだが後に米芾を好んだ。巧妙で力強い彼の書は多くの人に好まれた。肺を患い京都に歿した。墓表を親友の篠崎小竹が書いている。

(33) 九臯：幾重にも曲がりくねった奥深い沢。

(34) 守住貫魚 文化五、明治二十五（一八〇八—一九二）八十四歳。

徳島秋田町の生まれ。幼名は伸美、名は貫魚、字は士済、通称は徳次郎、号は是姓斎・回春斎・寄生軒・輝美・定輝。徳島藩の銃手・庄野延知の子。文政七年（一二二四）、十六歳で土佐派の渡辺広輝に十年間、画を学び、天保五年（一八三四）江戸に行き、住吉広定に入門し技を極めた。天保九年（一八三八）、藩の絵師となった。弘化一年（一八四四）、『亜墨新話』の挿画を描く。安政二年（一八五五）には京都で聖賢障子の補修を手伝った。明治十三年（一八八〇）、息子の就職と共に大阪に移り、画壇の重鎮となった。同二十三年（一八九〇）には小杉楳邨の推薦もあって、八十二歳で第一回の帝室技芸員に選ばれた。

(35) 久保仲輔 宝暦三、文政七（一七五三—一八二四）七十二歳。

讃岐古高松の生まれ。平賀源内が兄事した漢蘭医・久保桑閑の五男。諱は方亮、号は瓜岡。兄である久保方堅が別家したので、古高松の本家と医業を継ぎ、和漢蘭の医術を兼学し、症状・容態ごとにそれを使い分け、しかも適切だったので、患者は数百里を遠しとせずに至り、門は市を成すほどだったという。医術の余暇に絵を描くのが上手で、特に肖像画を得意とした。同郷の親しい親戚である柴野安枕・栗山・養貞ら親子の肖像画を描いた。久保家の子孫に、第二十四代日本学士院長の久保正彰氏がいる。

(36) 小澤輝興 文化四、嘉永五（一八〇七—五二）四十六歳。

徳島富田下代丁の生まれ。通称は豊太郎。医師玄節の子。守住貫魚に住吉派の画を学び、後に渡辺広輝に学んだ。

(37) 佐香貫古 文化九、明治三（一八二二—七〇）五十九歳。

徳島富田職町の生まれ。通称は荒蔵、別号は広胤・定賢。家は藩の銃卒。江戸に出て渡辺広輝に入門、後に住吉広定に学び、業成って帰国し、画

を以て業とし、後に藩の画師となった。人物画を得意とした。子の美古も画人として活躍した。孫娘のハルは徳島に和洋裁縫専門学校を開設し、それが後に香蘭高等学校となった。

(38) 森魚測 天保一、明治四十二（一八三〇—一九〇九）八十歳。

徳島の生まれ。森善次の子。名は宇吉。家は代々藩の鉄砲鍛冶を勤めた。九歳で守住貫魚の門に入り、画を学び、出藍の誉があった。貫魚より美明の号を与えられ、後に魚測の号が与えられた。江戸に行く意志があったが中止し、徳島市古物町に住み、画業に励んだ。後に各地を周遊した。明治十五年（一八八二）内国絵画共進会に出品したのを始め、諸展覧会に出品し、その技が認められ、宮内省からも用命があった。

(39) 野口小蘋 弘化四、大正六（一八四七—一九一七）七十一歳。

阿波麻植郡鴨島喜来の松村春岱の娘。名は親、初号は玉山。父が大阪で医者をしていた時に生まれる。十四歳で旅に出て父が名古屋で没したので母と共に名古屋に留まり絵を描いていたが、文久三年（一八六三）、京都に出て日根対山に入門した。また漢学と書を小林卓斎に、詩を岡本黄石に学んだ。明治四年（一八七二）東京に出て画技を高め各種展覧会に受賞し、女流画壇の第一人者になった。同十年（一八七七）、滋賀県人野口正章と結婚。後に華族女学校教授・帝室技芸員を歴任、同四十年（一九〇七）の第一回文部省美術展覧会では女性として唯一の審査員となる。

(40) 福地源一郎 天保十二、明治三十九（一八四一—一九〇六）六十六歳。

長崎新石灰町で儒医・福地荷庵の子として生まれる。幼名は八十吉、号は桜癡。安政四年（一八五七）に江戸に出て英語を森山栄之助に学び、外国奉行支配通弁御用雇として翻訳に従事した。文久二年（一八六二）には通訳として遣欧使節に参加し、ロシアとの国境線確定交渉に関与した。慶応一年（一八六五）には幕府使節として再び渡欧して仏語を学び、新聞・演劇・文学に興味を持った。維新後は士籍を返上して平民となり、浅草の裏長屋で戯作・翻訳で生計を立て、仮名垣魯文等とも交流した。その後私塾日新舎を開き、英語・仏語を教えた。明治三年（一八七〇）、大蔵省に入り、また伊藤博文と共に渡米し、翌年岩倉使節団の一等書記官として渡欧した。同七年（一八七四）、大蔵省を辞して政府系の『東京日日新聞』の発行所である日報社に入社し、西南戦争では従軍記者として戦争報道を行なった。同十一年（一八七八）、渋沢栄一らと東京商法会議所を設立。また東京府議会議員に当選し、議長となり、同十五年（一八八二）、立憲帝政党を結成し、同三十六年（一九〇三）には衆議院議員

となった。多くの著作を残して文化面における功績は大きく、福澤諭吉と並んで「天下の双福」と称された。

(41) 福澤諭吉 天保五〇明治三十四(一八三四)一九〇一 六十八歳。

中津藩通詞の豊前中津藩士の家に生まれる。号は雪池・三十谷人。緒方洪庵に蘭学を学び、独学で英学を学ぶ。安政五年(一八五八)に江戸に出て蘭学塾を開いた。三回に渡って幕府の遣外使節に随行して洋行。後に英学に転じ塾名を「慶応義塾」とした。維新後は新政府の招きを固辞して教育と言論活動に専念し、新しい思想の啓蒙に努めた。

(42) 箕作秋坪 文政八〇明治十九(一八二六)八六 六十一歳。

津山藩儒 菊池文理の次男として生まれる。はじめは箕作阮甫、次いで緒方洪庵の適塾にて蘭学を学び、それぞれの弟子となった。このあと阮甫の三女つねと結婚して婿養子となり、菊池大麓(秋坪の実家の養嗣子)・箕作佳吉(東大理学部で動物学教授)・箕作元八(歴史家)を生んだ。

その後、江戸幕府蕃書調所(東大の前身)の教授手伝となる。文久二年(一八六二)の幕府遣欧使節には津山藩翻訳方兼医師として加わり西欧を視察。帰国後は国境交渉の使節としてロシアへ派遣された。明治維新後は三又学舎を開設した。ここは慶應義塾と並び称される洋学塾の双壁であり、東郷平八郎・原敬・平沼騏一郎・大槻文彦などを輩出した。また、専修学校(専修大学の前身)の開設においても、法律経済科設置の協力をしている。秋坪は漢学の大家でもあった。また、明六社への参加など啓蒙思想家としても活動した。妻つねの死後、その妹で箕作省吾の未亡人であったしん(ちま、阮甫の四女)と再婚。しんとの間には長女直子(人類学者の坪井正五郎に嫁ぐ)を生んだ。

(43) 寺島宗則 天保三〇明治二十六(一八三一)九三 六十二歳。

薩摩国出水郷脇本(鹿児島県阿久根市)の郷士長野祐照の次男。幼くして伯父で蘭方医の松木宗保の養嗣子となり松木弘安と称した。十歳より蘭語を学び、十五歳で江戸に遊学し川本幸民らに蘭学を学ぶ。伊東玄朴の象先堂塾頭を経て安政三年(一八五六)、幕府の蕃書調所教授手伝となるが、薩摩藩主、島津斉彬の要請で翌年帰藩、製鉄・造船・ガス・写真・電信などの藩近代化事業に携わり、西洋文明技術の実際を会得する。蕃書調所教授手伝に復職後の文久二年(一八六二)、幕府遣欧使節に備医師兼翻訳方の資格で随行、慶応一年(一八六五)三月には薩摩藩遣英使節の一員として留学生を率いて渡英。二度の西欧体験から雄藩連合政権を主体とする統一国家構想を説く。維新後は外国官判事・外務大輔などを

歴任、創業期の外務省の整備充実に尽力し、電信事業や造幣事業にも大きな功績を残した。駐英公使を経て明治六年(一八七三)十月、参議兼外務卿に就任すると条約改正問題に尽力した。その後元老院議長・枢密院副議長などの要職を歴任、同十七年(一八八四)、伯爵となる。性格は深沈寡黙、経済にも一見識をもつ優れた政論家であった。

(44) 杉聴雨 天保六〇大正九(一八三五)一九二〇 八十六歳。

植木五郎右衛門の次男として周防国吉敷郡御堀村(山口市)で生まれる。名は孫七郎、諱は重華。字は子華。通称は徳輔・忠次郎・少輔九郎。別号は松城。杉家の養子となり、藩校明倫館で学んだ他、吉田松陰にも師事した。藩主の小姓を務めた後、文久二年(一八六二)、藩命により遣欧使節に従い欧米諸国を視察する。帰国後、下関戦争では井上馨とともに和議に尽くし、元治の内乱では高杉晋作を支持しつつも、保守派との軍事衝突には最後まで反対した。四境戦争では長州軍の参謀として活躍した。維新後には山口藩副大参事となる。廃藩置県後の明治四年(一八七二)には宮内大丞、秋田県令を歴任後、再度宮内大丞を務める。明治七年(一八七四)に宮内少輔、同十年(一八七七)に宮内大輔、同十一年(一八七八)に子爵に叙せられ、同三十年(一八九七)に枢密顧問官に転じた。漢詩を得意とし、書にも優れていた。

(45) 高橋由一 文政十一〇明治二十七(一八二八)九四 六十七歳。

江戸の佐野藩邸に生まれる。幼名は猪之助、のち怡之介。名は浩、字は剛。明治維新後に由一を名乗る。号は藍川・華陰逸人。はじめ狩野派を学ぶが、石盤洋画を志し、文久二年(一八六二)蕃書調所画学局に入り、川上冬崖に指導を受けた。その後、横浜の英国人特派画家ワグマンに師事。明治五年(一八七二)の「花魁」では吉原の遊女をリアルに描いた。同六年(一八七三)日本橋浜町に私塾天絵楼を設立、後進の指導にあたる。一貫して写実的な描写を通して。半身をそいだ塩鮓を描いた「鮓」はその代表作である。近世にも洋画や洋風画を試みた日本人画家は数多くいたが、由一は本格的な油絵技法を習得し、幕末から明治中期まで活躍した、日本で最初の「洋画家」といわれる。

(46) 守住勇魚 嘉永七〇昭和二(一八五四)一九二七 七十四歳。

守住貫魚の次男として徳島明神町に生まれる。妹に守住周魚がいる。幼年の頃から父に住吉派の絵を習い、明治四年(一八七一)三月から翌年八月まで、藩校の長久館内にある外国語学伝習所でドンケル・クルチュ

スに学ぶ。同八年（一八七五）に上京し、国沢新九郎の私塾彰技堂で画学を学んだ。翌年に工部美術学校に入学しフォンタネージに学ぶが、同十一年（一八七八）九月にフォンタネージが帰国すると、浅井忠らと退学し「十一会」を結成。一時郷里の徳島に帰るが、翌年に大阪専門学校（後の第三高等中学校）の画学教員に就任した。明治十五・十六年（一八八二・八三）に『大成普通画学本』十冊を出版し、同二十九年（一八九六）に三高助教で依願免官となった。また、明治二十八年（一八九五）から大正六年（一九一七）まで同志社の画学科を担当し、第三高等学校や京都高等工芸学校にも出講している。その間に京都に移り再び日本画を描き、織物の下絵なども手掛けた。

（47）黄檗鶴亭 享保七（天明五）（一七二二—一八〇六）六十四歳。

道号は玄峰・惠達・海眼。法諱は淨要・淨光・淨博。画号は鶴亭が有名だが、ほかに如是道人・如是主人・白羊山人・南窓翁・墨翁・五字庵などがある。長崎に生まれ、早い時期から聖福寺の僧となる。二十歳の頃に岳宗元璋に嗣法したが、師が没した二十五歳頃に僧籍を離れる。還俗後に沈南蘋の直弟子である熊斐の門下となり、彩色写生風の花鳥画を学び、独特の画風を確立。やがて大阪に出て画業で生計を立てた。大阪で沈南蘋の花鳥画を広め、一方で禅味のある墨竹図を好んで画いている。木村兼葭堂が画の弟子となったほかに、柳沢淇園・池大雅、黄檗僧の大鵬正鯤・聞中淨復などと親しく交友した。明和三年（一七六六）、再び黄檗僧に復帰し、四年後の四十七歳の時に萬福寺塔頭のひとつ紫雲院第六代住持となり、松隠堂の輪番塔主も勤める。紫雲院で十五年間過ごし、聖福寺の住持を請われたがこれを固辞し大阪、次いで江戸に出たが、下谷池之端において入寂した。

（48）岡田寧処 寛保二（文化七）（一七四二—一八一〇）六十九歳。

徳島藩大阪藩邸の勘定役の家に生まれる。名は約、武約、字は君章、通称は文治・善次・善二郎。別号は墨樵・南山・清白山人。十二歳頃から片山北海に古文辞学を学び後に中村惕斎流の朱子学に転じた。明和・安永年間に混沌社の詩人として活躍し、多くの文人と交流があった。安永七年（一七七八）父と共に徳島に帰り助任町に住んだ。諸役を歴任後、藩校の補材となり、寛政・文化にかけて藩の儒官・大小性格となった。また家塾の半間園で教えた。詩文・書画・剣道・射術・音曲に優れた。漢詩の交流は、篠崎三島・中井竹山・頼春水・古賀精里・尾藤二洲・頼山陽・柴野碧海・赤松鳩峰など三十名に及ぶ。書は張璠図を学び篆刻に

も長じた。筆・ひちりきの演奏に秀でた。

（49）鈴木芙蓉 宝暦二（文化十三）（一七五二—一八一六）六十五歳。

信州飯田伊賀良の生まれ。名は雍熙、字は文熙、通称は新兵衛、号は老蓮・芙蓉道人。木下勘平の子。はじめ郷里で、来遊した池大雅に学ぶ。のち江戸に行き、渡辺溪水に山水画・人物画を学ぶ。また儒学を林鳳谷に学ぶ。谷文晁は門人。同門の藩の儒者、柴野栗山の推挙で、寛政八年（一七九六）、徳島藩の絵師となった。主として江戸に住んだが、藩命で日本各地の写生旅行を行なつて木村兼葭堂・菅茶山・良寛・古賀精里・皆川淇園・大田南畝・頼春水・頼杏坪・大田錦城など多くの文人と交流した。画は達筆で比較的多く遺されている。娘の小蓮は早世し、鈴木鳴門が養嗣子となった。

（50）足利義根 延享四（文政九）（一七四七—一八二六）八十歳。

阿波那賀郡平島村（阿南市那賀川町）の生まれ。足利將軍家の子孫で義宣の次男。字は子寛・平岩、通称は熊八郎・佐衛門。母は持明院中納言元輔の娘。義根は兄の早世により平島公方九代当主となった。父が京都から招いた儒家の島津華山に幼少の頃から儒学を学び、華山の勧めでその師であった京都の龍草廬に入門し、研鑽を積み儒家としての名を高めた。漢詩・書をよくし、その住居で度々詩会を催した。ここに文化人も集まりそれによって地域文化が育った。高橋赤水や貫名崧翁にもその影響があった。のち徳島富田に住み、藩主重喜に増禄を申し立てたが許されず、文化二年（一八〇五）阿波を退去、京都等持院に隠棲した。この時多数の家臣も従ったが、経済的な裏付けがなく困窮し多くは離散した。義根は後に京都北野の崇禪寺に移り亡くなった。

（51）木村兼葭堂 元文一（享和二）（一七三六—一八〇二）六十七歳。

大阪北堀江で酒造業を営む。名は孔恭、字は世肅、通称は坪屋吉右衛門、別号は遜斎・巽斎。詩文を片山北海、本草学を津島桂庵・小野蘭山、画を僧鶴亭・池大雅、篆刻を高芙蓉に学び、書も修めた。珍書・標本などの収集家としても知られ、書画・詩文にも長じ、温厚な性格もあつて全国の文人・学者が彼を訪れた。寛政二年（一七九〇）、家業の造酒株を他人に貸し、トラブルがあつて一時伊勢長島に隠遁した。帰阪後は文具商を営んだ。著書も多く『兼葭堂日記』は当時の学者の動向を知る貴重資料である。

（52）日下部鳴鶴 天保九（大正十一）（一八三八—一九二二）八十五歳。

彦根藩江戸屋敷で田中惣右衛門の次男として生まれる。名は東作、字は

子暘、初めは東嶼・翠雨、後に鳴鶴、晩年に野鶴・老鶴・鶴叟・鶴廬と号した。彦根藩士日下部三郎右衛門の養嗣子となり、藩の田中芹坡・岡本黄石に学び尊攘に奔走した。維新後新政府の内閣大書記官になったが、大久保利通の死後に官を退き、書に一生を捧げた。書は初め巻菱湖の風を習ったが、京都で貫名松翁の屏風を見て感激し以後は私淑した。明治十三年（一八八〇）、楊守敬が来日するや、巖谷一六・松田雪柯と共に書法を学び、また漢魏六朝隋唐の古碑法帖に啓発され、以後書風が一変した。中国にも渡り龔曲園・呉大澂・楊岷・呉昌碩らと交流し「東海の書聖来る」と称された。中年以後、その書はいよいよ妙に入り、適勁高古、格調の高い書を以て著われ、日本の書道界に新風を起し、全国の学書者に大きな影響を与えた。全国を遊歴し名跡を巡って文人と交流し、書いた石碑は千基、弟子は三千人を超えた。その門流は鶴門と呼ばれ、現在まで書壇の中心として活躍している。

(53)

辻蘭室 安永九、安政三（一七八〇～一八五〇）七十七歳。

徳島富田の人。名は世道、字は大略、通称は準平。藩の銃卒・市右衛門の三男。幼時より学を好み、木村蘭皐・乾静斎について学んだ。長じて京都に出て皆川淇園に師事した。学業が成り、経学・文章に通じたので帰郷した。諸侯への仕官を勧められたが、父母の老齢のために断わった。東船場で私塾を開き、門弟数百人に及んだ。文政中、藩主より学業を賞され「町儒者」の号を賜った。性寛容で人と争うことなく、晩年は塾生に教えるほかは悠々自適の生活を送った。詩文集数巻があり詩書をよくした。

(54)

集堂勇左衛門 延享三、文化六（一七四六～一八〇九）六十五歳。

室鳩巢門下で徳島藩の侍講・集堂迂亭（一七〇二～一八四〇）の子。宝暦十一年（一七六〇）十六歳のとき父に代わって召し出されて御広間御番となり、のち奥小姓から物頭に進み、寛政三年（一七九一）には御鉄砲組頭さらに同五年（一七九三）四月には御武具方御用請持となって海防問題に努め、享和二年（一八〇二）六月、中老上席に進んだ。文化二年（一八〇五）には御年寄役となって三百石の禄が与えられた。同三年（一八〇六）には御武器御取調御用となり、江戸で佐藤信淵をスカウトして徳島に同行させ、砲術改良や海防に取り組ませた。同六年（一八〇九）には鮎喰河原で試射実験をし、大里海岸で自走火船の実験をした。しかし先進的な藩主の危機意識を理解しない保守派家老たちの反発で勇左衛門は突如左遷され、佐藤信淵は実験最中に出国した。勇左衛門はその年の

(55)

六月に失意のうちに江戸で病没した。

佐藤信淵 明和六、嘉永三（一七六九～一八五〇）八十二歳。

出羽国雄勝郡西馬音内村（秋田県羽後町）に佐藤信季の長男に生まれる。字は元海、通称百祐、号は椿園・松庵・祐斎・融斎・万松斎など。十三歳より父に伴われ諸国を遊歴、父が足尾で客死すると、天明四年（一七八四）十六歳で江戸に出て宇田川玄隨に蘭学を学び、木村桐斎より天文・地理・暦数・測量などを、また井上仲龍に儒学を学んだ。さらに諸国を遊歴して学を深めた。文化五年（一八〇八）徳島藩家老・集堂氏の食客として徳島において『海防策』『西洋列国史略』などを著す。その後上総国大豆谷村（千葉県東金市）に住み、同十二年（一八一五）平田篤胤に入門した。同じころ神道方・吉川源十郎に入門、神道講談所問題に連座し江戸払いとなった。文政期（一八一八～一八三〇）にその著作活動は活発となり、平田国学を吸収し、科学的知識を非合理的な天地開闢説に結びつけ、また産霊神を生産力の原理とする経済論、さらに統一国家の構想と、日本中心思想の上に立つ海外侵略策を展開した。天保四年（一八三三）禁を冒して江戸に入ったためさらに江戸十里四方追放となり、足立郡鹿手袋村（埼玉県浦和市）に塾居した。弘化三年（一八四六）許されて江戸に戻り、子信昭宅に同居し著述を続けた。

(56)

高島秋帆 寛政十、慶応二（一七九八～一八六六）六十九歳。

長崎の町年寄、四郎兵衛の三男。名は茂敦、通称は糾之丞・四郎太郎、字は舜臣。長崎に来て高島家に世話になっていた藤澤東岐に三年間学ぶ。父の後を継いで町年寄となり、砲術方を兼ね、次いで長崎会所調役頭取となる。文政八年（一八二五）に異国船打払令が出るとこれに反対し、砲術の改良が急務であることを長崎奉行に上申した。オランダ人のデ・フィニユーについて西洋流砲術を学んでその秘訣を会得し、歩騎砲兵の組織と戦術に通じた。その後もしばしば幕府に建議し、私費を投じて書籍・武器をオランダから購入して研究し門人は三百人に及んだ。天保十二年（一八四一）、幕命を受けて江戸で大砲・小砲の実演を行なって名声を上げ、これにより与力となって江川英龍ら幕吏に教授した。讒言により一時投獄されるも、ペリーの来航で赦され、砲術教授・師範役を勤めた。開港論者で書にも秀でた。

(57)

ゲベール銃：「ゲベール」とはオランダ語で「小銃」の意味である。一六七〇年代にフランスで開発され、一七七七年にオランダの軍隊が採用した。元々「敵の密集兵団の中に打ち込んで混乱させる」という使用目

的の銃で大量生産と構造の簡略化を優先としていたため、命中精度は悪い。初期は燧石式だったが、後に管打式（雷管式）に改められた。火縄銃とは異なり銃剣を装備できる。既に施条銃の時代となっていた西欧から旧式のゲベルが大量に日本に輸出された。また火縄銃とは発火装置が異なる程度だったため各地で国産ゲベルが製造された。輸入が始まった頃は薩摩藩・長州藩や幕府軍で採用されていたが、薩摩・長州では早い段階から、ゲベルよりも新式で命中率・射程距離に優れた施条銃であるミニエー銃やスナイドル銃へと更新を進めた。幕府軍も第二次長州征討以降は積極的に施条銃を導入し、幕府陸軍の歩兵隊などに支給した。そのため戊辰戦争時点ではゲベルは時代遅れの銃となっていた。

井上春洋 文化九〇明治二五（一八二一〜九二）八十一歳。

淡路洲本の生まれ。幼名は多門太、名は黙・玄黙・嘉猛、通称は蹊父、別号は春漁・泡翁・臥遊斎・文会楼・不鳴。徳島藩の銃隊長 前羽信近の子で、藩医井上玄貞の養子となる。中田南洋に師事の後、京都の小石元瑞に蘭医学を学び、傍ら頼山陽に漢詩を学んだ。初太郎の話を聞き取って漢詩に詠み込み、弘化三年（一八四六）『亜墨竹枝』を著した。長崎で産医学・種痘法を学んで帰り、嘉永二年（一八四九）に初めて種痘を行った。文久二年（一八六二）、藩命で西洋事情の調査にあたり、勧農・水田塩田の事務管理をし、藩政にも参加した。開国論を展開したために隠居を余儀なくされ、住地の前川中洲にちなんで不鳴を名乗った。隣家が前川秋香だった。徳島医学校一等助教・県庶務課編集係などを歴任した。

(59) 齋藤春溪 天保五〇安政五（一八三四〜五八）二十五歳。

撫養郡大津大代（鳴門市大津町大代）の女流画師。名はおまん。父の小五郎は小禄と称する力士であった。幼より画を好み、十二歳で京都に出て画を学んだ。後に越前・高松・福岡の藩公に聘せられた。花鳥・人物を得意とした。家にあつては黒モンペに黒足袋をはき、男性に近い服装をし、キセルでのタバコを愛用していた。師も不明、墓所も不明であるが、徳島最大の藍商の三木青里と親しかった。原鵬雲よりも一歳だけ年上の同年代の女流画師で画の勉強を始めた時期も近いので、鵬雲とも知り合いだっただろう。

(60) 平賀源内 享保十三〇安永八（一七二八〜七九）五十二歳。

讃岐大川志度の生まれ。高松藩志度浦蔵番の子。名は国倫、字は士彝、号は鳩溪、作家名は風来山人・天竺浪人・福内鬼外。高松藩校講道館で

学んだあと江戸に出て田村藍水に本草学を、林家で儒学を、のち国学を学ぶ。宝暦二年（一七五二）、兄事する高松の漢蘭医久保桑閑に従って長崎に遊学し、本草学や洋画を学び、蘭書から蘭学知識を得た。田沼意次の知遇を得て幕府への仕官を志し、高松藩士を辞したが、藩が他藩への仕官を許さず、以後民間学者として活躍。火浣布・寒暖計・エレキテルを製作し、秩父での金山・鉄山経営や陶器・毛織物製造を試みた。鉾山開発に訪れた秋田に洋風油絵を伝えた。また物産会を開きその物品目録を『物類品隲』にまとめた。一方で滑稽文学『根南志具佐』『放屁論』、浄瑠璃脚本『神靈矢口渡』を創作。誤って人を殺し獄中で病死した。

(61) 柴野碧海 安永二〇天保六（一七七三〜一八三五）六十三歳。

讃岐三木郡牟礼村に柴野栗山の弟・養貞の次男として生まれる。幼名は大吉、名は允升、字は応登、通称は平次郎、別号は東霞。七歳で京都に出て、京住みの徳島藩儒であった伯父栗山に就学すると共に養子となった。栗山が昌平黉の儒員になるとともに江戸に出て儒学を究め、寛政六年（一七九四）長崎に遊学して見聞を広げて江戸に戻った。また二十七歳の時に全国を遊歴し多くの諸儒と交流した。享和一年（一八〇一）二十九歳からは徳島に住み藩儒として徳島学問所で多くの後進を育てた。詩文に優れ特に文は全国的に有名で、墓表や題跋・賛などを得意とした。頼山陽・篠崎小竹と特に親しく交流した。

(62) 柴野竹斎 文化十三〇明治八（一八一六〜七五）六十歳。

阿波徳島の生まれ。碧海の子で通称は助三郎、碧海の後を継いで徳島藩儒となり、藩士の教育にあたった。詳細は不明。

(63) 豊岡菰叟 文化五〇明治十三（一八〇八〜八〇）七十三歳。

阿波板野郡宮島浦（徳島市川内町宮島）の生まれ。名は保煜、字は霞挙・僧弥、通称は黙之丞、別号は醉叟。豊岡新田開発で知られる板東茂六の子孫で、姓を豊岡に改めた。鉄復堂に儒学を学び、その博学と記憶力は四十宮石田と並称された。家は組頭庄屋で蔵書が多く、群書を読破した。二十八歳で郷主に拔擢され難題を解決して名庄屋と言われた。農芸・堤防・水利など経済分野の学問を究めたが、名典・西洋訳書にも詳しくあった。在職三十五年間で藩の訳書局に転じ、辞職後は詩文・書画に専念し、柴秋邨・四十宮石田・広瀬旭莊・大槻磐溪らと交流した。吉野川の利水を考究した著書が多い。娘が藍商の三木康治に嫁ぎ、三木家との交流も多かった。

(64) 徳島尋常中学校：明治八年（一八七五）名東県師範学校附属変則中学校

の設立が認可される。同十一年（一八七八）徳島師範学校附属変則中学校が廃止され、「徳島中学校」を開設。当分の間校長をはじめ職員は兼務は継続。同十二年（一八七九）中学校の校長が任命され、中学校の職員も任用されたため、徳島師範学校から組織的に独立。同十八年（一八八五）脇町中学校・富岡中学校・川島中学校を統合。東富田に校舎を新築し、師範学校とともに移転。同二十年（一八八七）徳島尋常中学校規則を制定。同二十六年（一八九三）徳島県立尋常中学校と改称。同二十九年（一八九六）脇町と富岡に分校を設置。同三十二年（一八九九）徳島県徳島中学校と改称。脇町分校が徳島県脇町中学校として、富岡分校が徳島県立富岡中学校として分離・独立。同三十四年（一九〇一）徳島県立徳島中学校と改称。改編・移転を経て現在は徳島県立城南高等学校となっている。

(65)

岡本斯文 天保十四（一八四三）一九一七）七十五歳。

徳島富田の人。晤室の子。字は裕太郎・優太郎・閑一。号は午橋・吾丘・寄瓢・楽瓢庵。家の学統を継いで、那波鶴峰に儒学を学び、二十四歳のとき、藩の儒曹権員となり、二年後に助教となった。明治三年（一八七〇）、東京に遊学し、安井息軒に学ぶ。のち、県立徳島中学校初代校長心得兼女子師範学校校長・師範学校校長・徳島女学校長などを歴任した。退任後も熱意が消えず、養淑会を設立して女性私塾の先駆者となった。また家学の友徳堂で門人の指導にあたった。

(66)

喜田貞吉 明治四（昭和一四）一八七二（一九一九）六十九歳。

徳島県那賀郡柳瀬村（小松島市柳瀬）の生まれ。帝国大学文科大学国史学科卒。日本歴史地理研究会を組織するなど、日本古代史に考古学・民族学的方法を取り入れる。法隆寺再建説を主唱。国定教科書の編集に従事、明治四十四年（一九一三）、南北朝正閏論問題で文部編纂を追われる。大正八年（一九一九）、『民族と歴史』を創刊。部落問題研究にも取り組んだ。同九年（一九二〇）に京都帝大教授。同十二年（一九二三）に東北大講師となり、古代史・考古学を担当。同研究室草創の基礎を築いた。林鶴一 明治六（昭和十）一八七三（一九三三）六十三歳。

(67)

徳島東富田紙蔵町（徳島市富田橋一（二丁目））の生まれ。旧制徳島中学校・第三高等学校を経て、明治三十年（一八九七）に東京帝国大学理科大学数学科を卒業。東京帝国大学では高木貞治・吉江琢児と同期であり、藤沢利喜太郎による「藤澤セミナー」に参加した。卒業の翌年から京都帝国大学理工科大学の助教授、続いて松山中学校の教師を務め、同四

十年（一九〇七）東京高等師範学校の講師に就いた。同四十四年（一九一四）四月には東北帝国大学理科大学に教授として迎えらる。同年八月、私費を投じて日本最初の数学専門誌『東北数学雑誌』を創刊し、東北帝大の教員の研究成果だけではなく、広く世界（日英独仏伊の五ヶ国）に論文の募集を行ない、その後の日本の数学の発展に大きく貢献した。数学に関する幅広い知識を持っており、教科書・啓蒙書の著作も多数存在する。晩年には和算の研究家としても活躍した。日本中等教育学会（現日本数学教育学会）を設立し、中学校教師の資質の向上に力を尽くした。

(68)

第三高等学校：京都市および岡山市に所在した旧制高等学校。略称は「三高」。溯源は明治二年（一八六九）に大阪で設立された舎密局に求められる。これは大阪英語学校→大阪専門学校→大阪中学校と改称される。この頃には約十年間、折田彦市が校長として運営を引っ張った。同十八年（一八八五）に大学分校となり中島永元が校長となる。同十九年（一八八六）四月、大学分校は中学校令に基づく第三高等学校となった。同年十一月に近畿・中国・四国にまたがる学区が設定され、高等学校を京都に移転することとなった。同二十年（一八八七）四月に折田彦市が校長に復帰。第三高等学校には本科が置かれた。また、文部省の告示により高等学校に医学部を置くこととなったことから、岡山市の岡山県医学校を第三高等学校にして編入して医学部とし、同二十一年（一八八八）四月に開部式が行なわれた。同二十二年（一八八九）九月、大阪市東区（現中央区）から京都市上京区（現左京区）吉田に移転が完了し、開業式が行なわれた。現在の京都大学吉田キャンパスの本部構内にあたる。同二十三年（一八九〇）には法学部を設置した。同二十七年（一八九四）三年制高校となり、第三高等学校と改称。昭和二十四年（一九四九）新制京都大学に統合。東京の第一高等学校（一高）が「自治」を標榜したのに対し、三高は「自由」を掲げた。改編を経て現在は京都大学総合人間学部および岡山大学医学部。

(69)

帝国大学理科大学：明治十年（一八七七）の東京大学設立時から理学部があったが、当初は数学科・物理学科・化学科・生物学科・星学科・工学科・地質学科・採鉱冶金学科の八学科で構成されていた。また、学部設置とともに小石川植物園が東京大学理学部附属施設となった。同十八年（一八八五）には、工学科および採鉱冶金学科が新設の工芸学部に移り、同十九年（一八八六）には数学科・星学科・物理学科・化学科・動

物理学・植物学・地質学からなる帝国大学理科大学となり、同時に臨海実験所も設置された。同三十年（一八九七）より東京帝国大学理科大学となった。改編を経て現在は東京大学理学部。

(70)

鳥居龍藏 明治三〇昭和二十八（一八七〇—一九五三）八十四歳。

徳島船場町のたばこ問屋で生まれる。六歳の時、観善小学校（新町小学校）に入学したが翌年中退。以後、生涯正規の学校教育を受けず独学で人類学を学ぶ。二十歳の時、修学のために上京。後に東京へ移住、帝国大学理科大学人類学教室標本整理係となり、坪井正五郎教授に師事する。明治二十九年（一八九六）から昭和十六年（一九四一）までの四十五年間に、国内はもとより沖縄（二回）、台湾（四回）、朝鮮（七回）、北千島、樺太、中国山東省（二回）、満州（九回）、蒙古（三回）、中国西南地域、東部シベリア（三回）、南米ペルー、ボリビア（旧インカ帝国）の各地で人類学・考古学上の実地調査を行なった。この間大正十年（一九二一）に文学博士の学位を得たほか、東京帝国大学理科大学助教授、国学院大学教授、上智大学教授、東北文化学院東京研究所研究員、燕京大学客座教授となる。昭和二十六年（一九五二）に中国から帰り、東京の建設大臣公舎に仮住して論文作成中に没した。著書多数。同郷の小杉樞郎が結婚の媒酌人で、何かと助力した。

(71)

坪井正五郎 文久三—大正二（一八六三—一九一三）七十一歳。

蘭学者坪井信道の孫として江戸に生まれる。父は信道の女婿、幕府奥医師坪井信良。明治十年（一八七七）大学予備門に入り、同十九年（一八八六）、帝国大学理科大学動物学科卒業。帝国大学大学院に進学し人類学を専攻、修了後の同二十一年（一八八八）、帝国大学理科大学助手。翌年より三年間イギリスに留学し、同二十五年（一八九二）十月帰国し帝国大学理科大学教授。遠縁にあたる民間の研究家林若樹がこの頃から助手として出入りする。同年蘭学者箕作秋坪の長女直子と結婚。同三十二年（一八九九）、理学博士号を授与された。日本の人類学の先駆者であるペテルスブルクで客死。人類学の創始者として鳥居龍藏などを育てる。

(72)

柳田国男と南方熊楠を結びつけ、また、玩具開発でも功績を残した。

小杉樞郎 天保五—明治四十三（一八三四—一九一〇）七十七歳。
徳島の生まれ。初名は五郎、のち樞郎、屋号は杉園。藩の中老西尾志摩安福の家臣明真の子。十二歳で寺島学問所で儒学を、父に和歌・物語を、池辺真榛と本居内遠に国学を学んだ。二十四歳で江戸の紀伊藩古学館で国文・和歌を学び、村田春野・小中村清矩・久米幹文らと親交した。文

(73)

蜂須賀茂韶 文久二—大正七（一八四六—一九一七）七十三歳。

徳島藩最後の藩主。幼より学を好み岡本晤室・四十宮石田・新居水竹・橋本晩翠らに学ぶ。明治一年（一八六八）、家督を継ぎ明治政府に仕えて議定・民部官知事・徳島藩知事に任じ、廃藩後、数年イギリスに留学、帰朝後、外務省・大蔵省の要職につき次いで元老院議長・東京府知事・貴族院議員・文部大臣・枢密院顧問を歴任した。この間に侯爵となり、また北海道雨龍牧場の経営、日本鉄道・東京海上保険・大阪紡績の創設、民間諸学会などの会長として貢献した。書にも卓越した。

(74)

高雲外 天保四—明治二十八（一八三三—一九五二）六十三歳。

徳島魚棚町（徳島市幸町）の生まれ。高良斎の長男。名は鋭一、字は子敏、別号は香雨。天保七年（一八三六）父の大阪転住に従って、藤澤東畠・篠崎小竹に儒学を学んだ。弘化三年（一八四六）、父の死後、家族は徳島に帰ったが、父の高弟で淡路の眼科医であった沖隆平に預けられ、洲本学問所教官の中田南洋から儒学を学んだ。二年後、広島で坂井虎山に儒学を学んだ。さらに江戸に出て昌平黉で経学を古賀謹堂・羽倉簡堂に、蘭学を川本幸民に学ぶ。オランダ語研鑽に努め、安政三年（一八五六）には徳島藩邸内の藩校長久館の蘭学教授となる。元治一年（一八六四）、江戸長久館廃絶後は帰徳し、洋学校創設に尽力。慶応一年（一八六五）末、寺島巽浜に洋学校が新設され、井出三洋らと洋学教授となった。明治二年（一八六九）、長久館に統合後も洋学教授を務めた。中小姓格四人扶持支配。その後官界に入り、同五年（一八七二）、太政官左院二等書記官生、同十四年（一八八二）、農商務省准判任御用係などを歴任した。

(75)

高良二 弘化四—大正十（一八四七—一九二二）七十五歳。

徳島市住吉本町の生まれ。高良斎の四男で、雲外の弟。名は良之助、のち良二に改める。号は温卿・晩香・後雨。十九歳で藩命により高橋顯正（のちの芳川顯正）・山田要吉らと長崎の済美館に英学を学び、明治三年（一八七〇）に米国学し、三年間プリンストン大学に学んだ。在米中

には折田彦市と親しかった。帰国後の同八年（一八七五）には文部省に出仕し、十月には大阪英語学校校長となり、在任三年間で同十三年（一八八〇）からは外務省に転じ、同二十五年（一八九二）まで勤務した。この間、同二十年（一八八七）蜂須賀正韶が英国ケンブリッジ大学に留学する際には英国まで随伴した。退職後は東京駒込東片町に閑居し、英語の本を読むのを楽しみ、欧米人と交流しながら日本と欧米の好ましい国際関係の維持に努めた。大阪英語学校で良二が力を入れた専修科設置は、後の第三高等中学校の原型となつて、その精神は親友の折田彦市に受け継がれた。

(76)

新居湘香、嘉永二〜大正六（一八四九〜一九一七）六十九歳。

徳島藩儒、新居水竹の次男。名は敦二郎。元老院中書記生となり、政府に出仕。かたわら、自由民権運動の結社である徳島自助社の幹部社員として活躍していたが、通論事件によつて罪に問われ退官した。禁錮二年の後、教育界に入り、明治十四年（一八八一）一月、徳島尋常中学校校長となり、四年間在勤した。退職後、同十九年（一八八六）二月に北海道庁長官付となり、庶務課・記録課に勤務、同二十三年（一八九〇）辞職後、東京府庁第三課・貴族院事務局・大蔵省調査局などに勤め、同三十六年（一九〇三）九月に再び北海道に渡つて札幌農学校の漢学講師となり、北海道の高等教育充実に尽力した。蜂須賀侯爵家の囑託も勤めた。詩書をよくした。

(77)

阿部有清、文政四〜明治三十（一八二二〜一九七）七十七歳。

阿波名西郡石井村の生まれ。初め虎吉、後に雄助と称し、号は伯周。十三歳で小出長十郎に和算と暦学を学び、高島耕齋に蘭学を学ぶ。安政三年（一八五六）、京都に上り土御門家の天文生となる。また中国・四国・九州の各地を遊歴して蘭学と西洋天文学を研究する。文久二年（一八六二）、徳島藩の徒士に抜擢され洲本の城地測量や津田砲台構築に尽くし、昇進して西洋数学担当方・藩水利方となる。明治二年（一八六九）に洋学教授となり、廃藩後は小学校教諭・師範学校教諭・大阪府一等教諭・県立徳島中学校教諭などを歴任した。明治初期、和算から洋算への移行期に新旧算法に精通した学者として貴重な存在だった。

(78)

武田丑太郎、天保十三〜大正六（一八五九〜一九一七）五十九歳。

徳島市佐古小裏丁の生まれ。梅太郎の長男。幼にして和算を父に学び、後藩校長久館に入り、阿部有清に数学を学び、英語を高島慎三郎・保三郎に、ドイツ語を劉小一郎・千原春甫らに、また詩文を四十宮石田・岡

久桂堂に学んだ。明治十二年（一八七九）二月から、徳島中学校で数学・物理学を教え、理数科教育の重要性を主張し、陸海軍将校の養成にも力を尽くした。徳島中学校で四十年間勤務し、多くの俊英を育てた。

(79)

有持卓平、文政十二〜明治二十六（一八二九〜一九三）六十五歳。

徳島富田町の生まれ。家老池田氏の外科医師。有持通仙の子。大阪で緒方洪庵の適塾に学び、大村益次郎と親しかった。慶応一年（一八六五）徳島の巽浜洋学校の蘭学助教となったが、明治三年（一八七〇）大阪に出て開成学校でハラタマに化学を学んだ。同五年（一八七二）徳島に戻り小学校副教授、同十年（一八七七）徳島師範学校雇、同十一年からは徳島中学校教諭も兼任した。同二十三年（一八九〇）樟脳製造法の特許をとった。

(80)

加田綱三郎、安政四〜？（一八五七〜？）

徳島の生まれ。明治三年（一八七〇）十一月、十三歳で一年半、徳島洋学校で、明治六年（一八七三）五月、十六歳から一年八ヶ月は阿部有清に数学を学んだ。明治八年（一八七五）二月、十七歳から半年間東京で高良二に英語を学んだ。同年八月、十八歳で電信寮に就職し算術教師になったが、九月に辞め、同九年（一八七六）一月から半年間は東京で新潟県人の小林雄七郎に英語を学んだ。後に大阪専門学校で数学を教え、学校が第三高等中学校に改称して京都へ移転してからも教えた。没年は不明。小出寿之太、安政五〜大正十二（一八五八〜一九二三）六十六歳。

(81)

徳島の生まれ。小出長十郎の養嗣子となった由岐太（一八二〇〜七六）の次男。十六歳の時、父が讃岐師範学校で一等助教になり、明治九年（一八七六）、十八歳の時に父を亡くした。翌年に徳島師範学校に勤め始めた。同十一年（一八七八）には京都に出て第三高等中学校で数学を教え、多くの人材を育てた。再び徳島で教鞭を執ることはなかった。

(82)

長井長義、弘化二〜昭和四（一八四五〜一九二九）八十五歳。

徳島常三島町の生まれ。初名は直安、後に長済。藩医・長井琳章の長男。幼時に父より本草学を学び、慶応一年（一八六五）、寺島の洋学校で高雲外や有持卓平らに蘭学を学び、堀裏の医師学問所で助教として勤め、同二年（一八六六）二十二歳の時、選ばれて長崎に留学し、マンズフェルトから医学を、ボードウィンから化学を学ぶ。下宿先が上野彦馬宅だったので特に化学に惹かれ、ここでは坂本龍馬・大久保利通・伊藤博文・芳川顕正・立木文龍らと交流している。明治二年（一八六九）から大学東校で学び、卒業後の明治四年（一八七一）第一回官費留学生としてド

イツに渡った。青木周蔵の斡旋も受けてベルリン大学でホフマンやチーマンら化学の權威に学び、バニリン酸・桂皮酸などの抽出に成功して学位を授与され、ドイツ人女性と結婚した。明治十七年（一八八四）日本の要請で帰国し、東京大学理学部化学科の教授となる。翌年にはエフェドリンを発見し、その合成に成功した。同二十年（一八八七）には日本薬学会会頭、同二十一年には理学博士となり、同二十六年（一八九三）帝国大学医学部で薬化学も担当した。日本女子大学の創立に尽力し、しばしばドイツに渡り日独親善にも尽くした。明治三十二年（一八九九）には徳島に精藍伝習所を設け、大正十四年（一九二五）には徳島高等学校（現在の徳島大学工学部・薬学部）での応用化学科製薬化学部誕生を後押しした。

(83) 済々黷：熊本市中央区黒髪二丁目にある。学校名は、『詩経』の一節「済済たる多士、文王以て寧んず」から採られている。創立の中心人物である佐々友房は熊本藩藩校時習館の出身で、保守佐幕派の思想グループである「学校党」に属していた。明治十年（一八七七）二十三歳のとき、西南戦争で重傷を負い、同年十月、懲役十年の刑を言い渡され宮崎の監獄に収監された。佐々は獄中で青年子弟の教育こそ急務であると痛感、同十二年（一八七九）一月に病氣のため出獄すると、四十八名の同志とともに熊本市に「同心学舎」を設立し、さらに同十五年（一八八二）二月には、儒教的要素の強い「三綱領」を教育方針の中心に据え「済々黷」として発足した。同三十四年（一九〇一）熊本県立中学済々黷、昭和二十三年（一九四八）、熊本県立済々黷高等学校と変遷し現在に至る。初代文部大臣 森有礼が旧制第五高等学校の設立をどこにするか考えていた時に、視察した済々黷の学風に感心して、明治二十年（一八八七）に熊本に設立した。陽次郎はここに明治三十年十月・三十一年二月（一八九七・一九〇〇）在職したが、この時、第五高校では夏目漱石が教鞭をとっていた。

(84) 奈良師範学校：明治七年（一八七四）教員伝習所として興福寺内に「寧楽書院」を創設。明治八年（一八七五）伝習所を奈良（小学）師範学校と改称。同二十一年（一八八八）奈良県尋常師範学校を創設し、校舎は奈良町大字登大路二十三番地の公園地借用（同年十一月開校式）。同三十一年（一八九八）、師範教育令により、奈良県尋常師範学校を奈良県師範学校と改称。改編を経て、現在は奈良教育大学となっている。陽次郎はここに明治三十三年二月・三十五年十一月（一九〇〇・〇二）在職した。

(85) 広島県立忠海（なつみ）中学校：広島県竹原市忠海床浦にあった旧制中学校。明治三十年（一八九七）五月、旧広島県立忠海中学校開校。同三十三年（一九〇〇）四月、豊田尋常中学校開校。同三十四年六月、広島県第四中学校となる。同三十五年（一九〇二）四月、広島県立忠海中学校と改称。大正七年（一九一八）八月、新校舎落成。昭和二十三年（一九四八）五月、学制改革で広島県立忠海西高等学校となり、同二十五年（一九五〇）広島県立忠海高等学校となり、現在に至る。陽次郎はここに明治三十五年十一月・大正六年八月（一九〇二・一七）在職した。

(86) 愛知県田原町立中学成章館：愛知県田原市田原町池ノ原にあった旧制中学校。文化七年（一八一〇）田原藩主三宅康和が藩校を設立。翌年、『論語』公治長編の中の「斐然成章」の句に基づいて「成章館」と名付けた。明治四年（一八七二）廢藩置県に伴い一度廃校となる。明治三十四年（一九〇一）、成章館を再興。この年を現在の学校創立年としている。大正八年（一九一九）渥美郡立成章中学校が創設し、同十一年（一九二二）郡制廃止により成章中学校を県立移管した。昭和二十三年（一九四八）に学制改革により、旧制成章中学校と旧制田原高等女学校を統合し、愛知県立成章高等学校となり、現在に至る。陽次郎はここで大正六年九月・十年一月（一九一七・二二）在職した。長男の正一が大正八年（一九一九）に渥美郡立成章中学校に入学し陽次郎の授業を受けている。

(87) 徳島県脇町中学校：徳島県美馬市脇町にあった旧制中学校。明治十二年（一八七九）、高知県立脇町中学校として開校（翌年徳島県に移管）。同十八年（一八八五）年、脇町・富岡・川島の三中学校を廃止し、徳島中学校に統合。同二十九年（一八九六）、徳島県尋常中学校第一分校として開校。同三十二年（一八九九）、徳島県脇町中学校として独立。昭和二十三年（一九四八）、徳島県立脇町高等学校となり現在に至る。陽次郎は大正十年一月・退職の十三年八月（一九二二・二四）在職した。長男の正一も同時期に在学して、同十二年（一九二三）三月に卒業した。

(88) 池田勇人 明治三十二・昭和四十（一八九九・一九六五）六十五歳。広島県豊田郡吉名村（竹原市）に酒造家と郵便局長である池田吾一郎の二男として生まれた。旧制忠海中学校、旧制第五高等学校を経て京都帝国大学法学部卒業。大蔵次官、衆議院議員（七期）、大蔵大臣（第五十五・六十一・六十二代）、通商産業大臣（第二・七・十九代）、経済審議庁長官（第三代）、自由党政調会長・幹事長を歴任し、昭和三十五・三十九年（一九六〇・六四）に内閣総理大臣（第五十八・五十九・六十代）を務

めた。所得倍増を唱え、高度経済成長政策を推進。位階は正二位。勲等は勲二位。
岡本村南 明治三十(一八七〇)〜一九五五) 八十六歳。

(89) 徳島富田浦の生まれ。家老賀島氏の家臣 金沢勝の三男。名は由喜三郎。十三歳の頃から岡本家の友徳堂で漢学を学ぶ。明治十九年(一八八六)にその才能を見込まれて岡本斯文の養子となり、家学を継承する。同二十二年(一八八九)に大阪の泊園書院に入り、同二十四年(一八九一)には東京の明治法律学校に入学。さらに友徳堂出身の本田種竹の斡旋で東京帝国大学教授島田篁村の私塾に入る。二十七年(一九〇四)に徳島に帰り、徳島県師範学校助教授を経て県立徳島中学校教諭となり三十五年間に在職して優れた漢文教育を行なった。一方で逍遙同好会を設立して漢詩文の振興に尽くした。

(90) 松山高等商業学校：大正十二年(一九二三)に松山出身の大阪の実業家、新田長次郎により愛媛県松山市文京町に創立された。初代校長には旧大阪高等商業学校校長の加藤彰廉を選任。昭和十九年(一九四四)に松山経済専門学校に改称。同二十四年(一九四九)、松山商科大学となり、平成一年(一九八九)松山大学に改称し、現在に至る。

(91) 講談社：創業者の野間清治により、明治四十二年(一九〇九)十一月に「大日本雄弁会」として設立される。当初は弁論雑誌である『雄弁』を出版していた。『講談社』の名称はその名の通り「講談」に由来するもので、『講談倶楽部』を創刊した同四十四年(一九一一)から大日本雄弁会と併せて使用した。評論家の徳富蘇峰は、戦前の少年や青年たちに大きな影響を与えた講談社を「私設文部省」と評した。昭和二十年(一九四五)に野間省一が四代目社長に就任し、同三十三年(一九五八)に「株式会社講談社」と改称。その後も野間一族が社長に就任し現在に至る。「面白くて為になる」をモットーに、戦前から大衆雑誌『キング』『少年倶楽部』などの様々な雑誌や書籍を出版した。『吉川英治全集』『日本語大辞典』などを出版する傍ら、多数の文学賞を主宰した。傘下にキングレコード・光文社・日刊現代・星海社などを持ち、通称「音羽グループ」を形成している。

(92) 瀬戸内商船：広島県尾道市に本社を置く海運・船舶会社で、今治〜尾道間や多度津〜広島間など瀬戸内海で多くの航路を開設し運行を行なっていた。バス事業は大正八年(一九一九)に多度津港〜多度津駅を結ぶバス路線を開設したことに始まる。昭和初期には、瀬戸内商船の他、昭和

自動車・文化自動車・今治自動車・今治市営バスなどがバス路線を開設し今治市内ではバス事業者が乱立していた。しかし戦時下にて、陸上交通事業調整法などの制定によりバス事業の統合が行なわれた中で、瀬戸内商船が母体となる瀬戸内運輸が統合主体となり東予地域のバス事業者を統合した。また、海務院の指導により百トン未満の船舶統合が行なわれるようになり、これに伴って瀬戸内商船も所有船舶を広島県汽船(瀬戸内海汽船の前身)・東海汽船に現物出資し、尾道〜今治間の貨物船舶事業(一九七五年に撤退)以外から撤退した。これによりバス事業者へと事業を転身し、現在は愛媛県今治市に本社を置く瀬戸内運輸株式会社となり、瀬戸内バスを運行している。

(93) 野間豊五郎 天保十一年(一八四〇)〜一九三四) 九十四歳。
越智郡大島の本庄村(今治市吉海町)の農家に生まれた。本庄村戸長・学務委員・勸業委員、津倉村助役・村長、越智郡会議員を歴任した。傍ら、製塩・船舶業を営んだ。明治二十七年(一八九四)十一月、村上芳太郎辞任に伴う補欠選挙で県会議員に当選、二十九年(一九〇六)三月まで在職した。三十一年(一九〇八)三月、第五回衆議院議員選挙に自由党から推されて第二区で出馬当選、同年八月の選挙でも再選された。長男信濃が家業を発展させ、東予運輸・瀬戸内運輸会社を設立した。



野間豊五郎像と顕彰碑
昭和2年(1927)
愛媛県今治市吉見町

(94) 東亜海運株式会社：昭和十四年(一九三九)、日中間の船舶運輸を目的として設立された海運会社。日清汽船会社を吸収合併した。初代社長は河田烈。本社は東京、支所は横浜・大阪・神戸・門司・長崎・台北・天津・大連・青島・上海など十六箇所。太平洋戦争終戦時に閉鎖機関令の指定を受けて特別清算した。同二十六年(一九五一)には東京汽船の出資でリニューアルし、同三十六年(一九六一)に東京湾フェリーに社名変更して現在に至る。

(95)

八幡空襲^{やわたらふくそう}：第二次世界大戦中の昭和十九年（一九四四）六月十六日、戦略爆撃機B29が陸上基地を拠点として行なった初めての日本本土空襲では、九州北部の官営八幡製鉄所を第一目標として計七十五機が出撃し、うち四十七機が八幡などを爆撃した。八幡製鉄所の被害は僅かであったが、爆撃は北九州五都市（八幡・小倉・戸畑・門司・若松）に及び、二百七十名以上が犠牲となった。これがその後の大規模な本土空襲の発端となった。八幡市は昭和十九年（一九四四）八月二十日にB29によって二度目の空襲を受け、さらに同二十年（一九四五）八月八日の三度目の空襲ではB29から焼夷弾爆撃を受け、北九州の市街地は壊滅的な被害を被った。

(96)

長崎原爆：昭和二十年（一九四五）八月九日、第二回目の原爆投下は第一目標が福岡県小倉市（北九州市小倉区）、第二目標が長崎市であった。午前九時四十分、大分県姫島方面から小倉市の投下目標上空へ爆撃航程を開始し、九時四十四分、投下目標である小倉陸軍造兵廠上空へ到達。しかし爆撃手が目視による投下目標確認に三度失敗する。その間に天候が悪化、日本軍高射砲からの対空攻撃が激しくなり、また、陸軍芦屋飛行場と海軍築城基地から零戦が緊急発進してきた事も確認されたので、目標を小倉市から第二目標である長崎市に変更し、午前十時三十分頃、小倉市上空を離脱した。約二十分後、長崎県上空へ侵入すると、やはりここも雲に覆われていたが、戦闘機の迎撃も対空砲火もなく、雲の切れ間から一瞬だけ眼下に広がる長崎市街が覗いたので、高度九千mから原爆「ファットマン」を投下した。午前十一時二分に原爆は長崎市浦上地区の約五百m上空で爆発した。当時長崎市の人口は二十四万人だったが、死者七万四千人、けが人七万四千人に及んだ。長崎原爆はブルトニウム原爆であり、八月六日に広島に投下されたウラン原爆「リトルボーイ」の一・五倍の威力であった。長崎市は周りが山で囲まれた特徴ある地形であったため、熱線や爆風が山によって遮断された結果、広島よりも被害は軽減されたが、周りが平坦な土地であった場合の被害想定は広島に落とされた原爆の威力を超える。仮に最初の標的であった小倉に投下されていた場合、平坦な土地が広がり、本州と九州の接点に位置するために、関門海峡が丸ごと被爆し、現在の北九州市一帯と下関市まで被害は広がり、死傷者は広島よりも多くなっていたと推測されている。

主な参考文献

- ・『阿波人物志』 藤井 喬 原田印刷出版 一九七三年
- ・『阿波洋学史の研究』 佐光 昭二 徳島県教育印刷 二〇〇七年
- ・『阿波の蘭学者』 福島 義一 徳島県出版文化協会 一九八二年
- ・『徳島 城と町まわりの歴史』 河野 幸夫 聚海書林 一九八二年
- ・『徳島の百人』 三原 茂雄 徳島の百人刊行会 一九六八年
- ・『徳島数学散歩』 三原 達雄 原田印刷出版 二〇〇二年
- ・『阿波の歴史』 三好昭一郎・猪井 達雄 講談社 一九七五年
- ・『史窓』三十五号 宮永 孝 新潮社 二〇〇五年
- ・『文久二年のヨーロッパ報告』 太田 剛 『書道文化』第五号所収 一九八九年
- ・『阿波の近世書道文化』 太田 剛 『書道文化』第五号所収 二〇〇九年
- ・『特別展 西洋美術との出会い ——徳島の四人—— 原鵬雲・井上辨次郎・守住貫魚・守住勇魚』 江川 佳秀 徳島県立近代美術館 二〇一三年
- ・『文久二年幕府遣欧使節団に随行した絵師 原鵬雲をめぐる』 明治美術学会 二〇一三年
- ・『生誕二百年 守住貫魚 ——御絵師・好古家・帝室技芸員——』 徳島県立博物館 二〇〇九年
- ・『三木ガーデン歴史資料館所蔵の主要徳島関係絵画・書跡の作者と作品について』 須藤 茂樹 『三木安平氏古稀記念論集』所収 一九九六年
- ・『秘められた阿波史 ——史譚—— 白い波・青い海——』 福島 義一 徳島出版株 一九九五年
- ・『阿波の顔 肖像画から見た阿波史』 根津 寿夫 徳島市立徳島城博物館 二〇〇四年
- ・『歴史のなかの鉄砲伝来 種子島から戊辰戦争まで』 国立歴史民俗博物館 二〇〇七年
- ・『喜田貞吉著作集十四 六十年の回顧・日誌』 喜田 貞吉 平凡社 一九八二年
- ・『雲城詩稿』 三木與吉郎 三木産業株式会社 一九五八年
- ・『父たちとの語らい』 久保 正彰 栗山顕彰会 二〇一〇年

- ・『篠崎小竹』 木崎 愛吉 玉樹文房堂 一九二四年
 - ・『亜墨新話』 複写本 前川秋香ら著 長尾啓太郎氏蔵 原本一八四四年
 - ・『亜墨漂流新話』 写本 四国大学図書館蔵 年代不詳
 - ・『初太郎漂流記』 河野 太郎 徳島県教育界出版部 一九七〇年
 - ・『徳島藩士譜』 上中下巻 宮本武史編 徳島藩士譜刊行会 一八八九年
 - ・『徳島市土地台帳』 徳島市役所蔵 明治時代、
 - ・『徳島市下助任村第十二号字門除地籍図』 徳島市役所蔵 明治時代
 - ・『喜根井陽次郎履歴書』 喜根井陽次郎 徳島県立脇町高等学校蔵
 - ・『芳越 創立廿五周年記念号』 脇町中学校芳越同窓会 一九二一年
 - ・『芳越―八十年目で見る叙事詩―』 徳島県立脇町高等学校 一九二四年
 - 一九七六年
- その他、各種インターネットサイトを参考にした。

喜根井家・岡本家・原家 関係年譜

年号	西暦	干支	喜根井家	略室	鵬雲	日付	喜根井家・岡本家・守住家・原家・高家の事象	徳島・日本・世界の事象
安永 7	1778	戊戌				1. 21	喜根井周右衛門の長男、長次郎が夭逝。	貫名菴翁が出生。合田如玉が那波魯堂を徳島藩儒に推挙。
						4. 4	喜根井本家の春岸智良信女が没。	
安永 8	1779	己亥				12. 18	平賀源内が没。	市河米庵が出生。
安永 9	1780	庚子						光格天皇即位式。頼山陽が出生。
天明 1	1781	辛丑	2代			2. 2	徳島藩儒合田如玉が57歳で没。	篠崎小竹が出生。
天明 2	1782	壬寅	1				喜根井周右衛門の男児、善種が出生。	阿波国は大洪水で19万石の損失。
						8. 11	喜根井本家の空天一零居士が没。	
天明 3	1783	癸卯	2					
天明 4	1784	甲辰	3			7. 3	徳島藩儒集堂迂亭が85歳で没。	
天明 5	1785	乙巳	4			12. 24	黄檗鶴亭が64歳で没。	
天明 6	1786	丙午	5					阿波国は大洪水で19万石の損失。
天明 7	1787	丁未	6					
天明 8	1788	戊申	7				柴野栗山が昌平塾教官となり江戸に行く。	
寛政 1	1789	己酉	8			9. 11	徳島藩儒那波魯堂が63歳で没。	
寛政 2	1790	庚戌	9			1. 19	喜根井周右衛門の男児が夭逝。	松平定信・柴野栗山が寛政異学の禁を実施。
寛政 3	1791	辛亥	10				集堂勇左衛門が御鉄砲組頭となる。	寺島学問所を興す。
寛政 4	1792	壬子	11				丸山徳弥が日向へ行き製糖法を学ぶ。	露人ラクスマンが根室で通商要求。
寛政 5	1793	癸丑	12			4 月	集堂勇左衛門が御武具方御用請持となる。	
寛政 6	1794	甲寅	13			5 月	東洲斎写楽の版画最盛期（～翌年1月）。	柴野碧海が長崎に遊学。
寛政 7	1795	乙卯	14				医師学問所を開き、小原春造を教授とする。	円山応挙が没。
寛政 8	1796	丙辰	15			7. 29	喜根井本家の貞治童子が夭逝。	
寛政 9	1797	丁未	16				周右衛門が病氣退職。善種が職を嗣ぐ。	
寛政10	1798	戊午	17				岡本遜斎が30歳で徳島に漢学塾を開く。	皆川淇園が没。
寛政11	1799	己未	18			5. 19	高良斎が出生。	長沢芦雪が没。
寛政12	1800	庚申	19			4. 25	周右衛門が没。善種が2代目当主となる。	伊藤若冲が没。
享和 1	1801	辛酉	20				柴野碧海が徳島藩儒となる。	蜂須賀重喜が64歳で没。
享和 2	1802	壬戌	21			6 月	集堂勇左衛門が中老上席に進む。	久保仲輔が柴野栗山67歳の肖像画を描く。
享和 3	1803	癸亥	22					
文化 1	1804	甲子	23				阿波の風雨出水で家の被害が1586戸。	露人レザノフが長崎で通商要求。
文化 2	1805	乙丑	24				集堂勇左衛門が御年寄役に進み300石の禄。	足利義根が徳島から京都に移住。
文化 3	1806	丙寅	25			11. 8	周右衛門の妻が没。	幕府が外国船のための海防を諸藩に命ずる。
							集堂勇左衛門が御武器御取調御用となる。	
文化 4	1807	丁卯	26			12. 1	柴野栗山が72歳で没。	乾純水が御番医となる。
文化 5	1808	戊辰	27	1		3. 23	岡本晤室が遜斎の子として出生。	佐藤信淵が阿波に入る。フェートン号事件。
						7. 11	守住貫魚が出生。	
文化 6	1809	己巳	28	2			集堂勇左衛門が65歳で没。	佐藤信淵が阿波を出る。
文化 7	1810	庚午	29	3				徳島藩の大坂蔵屋敷焼失。
文化 8	1811	辛未	30	4				露人プロウニンを捕縛。
文化 9	1812	壬申	31	5		1 月	井上春洋が洲本銃隊長の前羽家で出生。	
							佐香貫古が出生。	
文化10	1813	癸酉	32	6			善種が年寄役に就任。師の曾根維石が没。	蜂須賀斉昌が12代徳島藩主。新居水竹が出生。
文化11	1814	甲戌	33	7		11月	高島耕斎が出生。	蜂須賀治昭が58歳で没。
文化12	1815	乙亥	34	8				『阿波志』成る。
文化13	1816	丙子	35	9				頼春水が没。
文化14	1817	丁丑	36	10		10月	高良斎が長崎へ遊学し吉雄如淵に学ぶ。	三木延歳・古賀精里・司馬江漢が没。
文政 1	1818	戊寅	37	11		2 月	幕府が鎌倉で大砲の試射。	英人ゴードンが浦賀で通商求め幕府は拒絶。
文政 2	1819	己卯	38	12				仁宇谷一揆。上山一揆。
文政 3	1820	庚辰	39	13		3. 7	斎藤十郎兵衛が58歳で没。	
						5. 3	阿部有清が出生。	蜂須賀斉裕が徳川家斉の第22子として出生。
						9. 26	善種の先妻モセが没。	
文政 5	1822	壬午	41	3代	15		乾純水が医師学問所本草講釈となる。	小原春造・重政堂田善が没。
文政 6	1823	癸未	42	1	16		善種の甥喜根井文行が出生。	独人シーボルトが長崎に赴任。
文政 7	1824	甲申	43	2	17		守住貫魚が江戸で渡辺広輝に入門。井上春洋が中田南洋に学ぶ。	久保仲輔が72歳で没。高島深造が蘭医学で徳島藩に召される。
文政 8	1825	乙酉	44	3	18	12. 21	善種の次女コトが夭逝。	異国船打払令。高島五郎が出生。
文政 9	1826	丙戌	45	4	19		高良斎がシーボルトに随行して江戸参府。	西又漢が没。
							貫魚が家督を相続しながら住吉派の絵を学ぶ。	
文政10	1827	丁亥	46	5	20	1. 26	徳島藩儒岡本遜斎が59歳で没。	『日本外史』が松平定信に献上される。
文政11	1828	戊子	47	6	21	2. 5	高橋由一が出生。	シーボルト事件。
文政12	1829	己丑	48	7	22		高良斎がシーボルト事件で出島に幽閉される。	日和佐に英国船が来る。
天保 1	1830	庚寅	49	8	23	9. 12	森魚洞が出生。	久保仲輔画「竹林閉基図」に柴野碧海が賛を書く。
天保 2	1831	辛卯	50	9	24	5 月	高良斎が長崎から徳島に帰り蘭学指導。	井上春洋が小石元瑞・頼山陽に学ぶ。
							高島秋帆が蘭国からケペール銃を輸入。	
天保 3	1832	壬辰	51	10	25	9. 23	頼山陽が53歳で没。	
天保 4	1833	癸巳	52	11	26	3. 13	高雲外が出生。守住貫魚が江戸に出る。	伊東玄朴が江戸で蘭学塾を開く。
							阿部有清が小出長十郎に数学を学ぶ。	
天保 5	1834	甲午	53	12	27		守住貫魚が住吉広定に入門。斎藤春溪が出生。	慈光寺の春養の頂相が描かれる。
						12. 30	小杉樞樞が出生。	

「幕末徳島の書家 喜根井善種とその後裔——十六歳の原鵬雲が描いた肖像画から始まる物語——」

年号	西暦	干支	喜根井家		晤室	鵬雲	日付	喜根井家・岡本家・守住家・原家・高家の事象	徳島・日本・世界の事象
天保6	1835	乙未	54	13	28	1		原鵬雲が出生。有持阜平が出生。	陰徳倉を新町川北に建設。柴野碧海が63歳で没。高島耕斎が大阪で緒方洪庵に学ぶ。
								貫魚が一橋家の障壁画を描く。	
天保7	1836	丙申	55	14	29	2		貫魚が徳島に戻り、徳島城に障壁画を描く。	三木順治が出生。
								高良斎が大阪移住。	
天保8	1837	丁酉	56	15	30	3		貫魚が諸国巡礼し、各地の風景を写す。	新居水竹が篠崎小竹に入門。大塩平八郎の乱。
天保9	1838	戊戌	57	16	31	4		貫魚が徳島藩御用絵師となる。	新居春洋が没。徳島藩主が幕府に4万両献納。
天保10	1839	己亥	58	17	32	5		佐香美古が出生。	蜜社の獄。
天保11	1840	庚子	59	18	33	6		高良斎が明石藩医となる。野間豊五郎が出生。	アヘン戦争が始まる。高島秋帆が幕府に上申。
天保12	1841	辛丑	60	19	34	7	2.8	善種の嫡男敬太が没。	栄寿丸が漂流する。芳川顕正が山川町で出生。
								高島秋帆が幕臣となり、西洋砲術教授となる。	
天保13	1842	壬寅	61	20	35	8			初太郎がメキシコで暮らす。アヘン戦争終わる。
天保14	1843	癸卯	62	21	36	9	4.20	岡本斯文が出生。佐賀藩が西洋砲製造。	蜂須賀斉裕が藩主となり堺裏に医師学問所。
弘化1	1844	甲辰	63	22	37	10		貫魚が『垂墨新話』の挿画を描く。	初太郎が徳島に帰る。『垂墨新話』成る。
弘化2	1845	乙巳	64	23	38	11	7.24	長井長義が徳島常三島で出生。	事実上の開国。海防掛を設置。
							9.19	喜根井本家の男性が没。	
弘化3	1846	丙午	65	24	39	12	9.13	高良斎が没。井上春洋の『垂墨竹枝』完成。	孝明天皇が即位。米墨戦争が始まる。
弘化4	1847	丁未	66	25	40	13	7.16	原鵬雲が守住貫魚に入門。	関東沿岸の防備を強化。
								高雲外が15歳で淡路の沖隆平に預けられる。	
嘉永1	1848	戊申	67	26	41	14			米墨戦争が終わり、米国でゴールドラッシュ。
嘉永2	1849	己酉	68	27	42	15	5.28	善種の後妻キセが没。	小石元瑞・葛師北斎が没。米国船・英国船が来航し幕府が対抗策を諸大名に諮問。高雲外が広島で坂井虎山に学ぶ。井上不鳴が徳島で種痘法を実施。江川英龍が韭山に反射炉を建設。
							8.14	善種が没。文行が3代目となる。	
							9月	岡本晤室が善種の墓表を書く。	
嘉永3	1850	庚戌		28	43	16	8月	文行の長男興一郎が出生。	井伊直弼が彦根藩主となる。
								善種の肖像画・賛が完成。鵬雲16歳。晤室43歳。晤室が小奉行となる。	
嘉永4	1851	辛亥		29	44	17	7月	高島耕斎が徳島藩医となる。篠崎小竹が没。	ジョン万次郎が米国から帰国。
嘉永5	1852	壬子	1	30	45	18		文行の次男文五郎が出生。(喜根井家4代目)	高島耕斎が藩医となる。
嘉永6	1853	癸丑	2	31	46	19		幕府が西洋砲術の修行を奨励する。	米人ペリー来航。クリミア戦争(～1856)
安政1	1854	甲寅	3	32	47	20		徳島藩が大森・羽田の警護役となり、原鵬雲も銃卒として出陣し、その様子を描く。高雲外が蕃書取調所で川本幸氏に蘭学を学ぶ。	日米和親条約。東海・南海大地震。前川秋香が54歳で没。撫養に「金光山碑」建立。小杉樞郎が西尾氏に随行して江戸に1年間滞在。
								長崎に海軍伝習所で蘭人ボンベが医学教授。	
安政2	1855	乙卯	4	33	48	21		井上春洋が『遐邇貫珍和解』を出版。	日米修好通商条約。江戸大地震。
安政3	1856	丙辰	5	34	49	22		文行の三男安蔵が出生。岡本晤室が49歳で藩の備員となる。9月、守住貫魚が柴野栗山像(久保伸輔写)を模写。高島五郎が蕃書取調所教授となる。海防掛にケペール銃が下賜され、西洋訓練開始。	江戸藩邸に長久館を設置し、高雲外が蘭学教授、新居水竹が漢学を教え、学頭となる。小杉樞郎が国学助教となる。井上春洋が徳島医学校一助教授。
								岡本晤室が江戸長久館教授となる。蕃書調所に幕臣や諸藩士の入学を許す。	長崎に軍艦操練所。小杉樞郎が江戸の紀州藩古学館で学ぶ。
安政5	1858	戊午	7	36	51	24		斎藤春溪が没。福沢諭吉が蘭学塾を開く。阿部有清が徳島寺島に数学塾を開く。	井伊直弼が老老。乾純水が没。高島耕斎が医師学問所の洋学教授肝煎となる。
安政6	1859	己未	8	37	52	25		守住周角・武田丑太郎が出生。高島耕斎が47歳で江戸で没。	蜂須賀斉昌が没。シーボルトが日本再訪し井上春洋が学ぶ。英人グラバー来日。江戸に海軍操練所。
万延1	1860	庚申	9	38	53	26	夏	般若院で斎藤春溪の追悼書画展に多数の書画人が出品。(鶴亭「戴真王之図」)	桜田門外の変。勝海舟ら遣米使節団が出発。高島五郎が外国奉行所外国方で勤務。
文久1	1861	辛酉	10	39	54	27		英人ワグマンが横浜に住み始める。	米国が南北戦争(～1865)。
文久2	1862	壬戌	11	40	55	28	1月	原鵬雲が使節団に随行し仏・英・蘭・露・普・甫を旅行。英国でロンドン万博を視察。	公武合体。4月に小杉樞郎が西尾志摩に随行して江戸で勤王。8月に生妻事件。参勤交代緩和で江戸人口減少。徳島にコレラ流行。
							9月	榎本武揚ら第2次遣欧使節が出発。ワグマンが「ジャパンパンチ」発刊。	
文久3	1863	癸亥	12	41	56	29	4月	原鵬雲が帰国し、守住貫魚に報告。	天誅組事件。薩英戦争。貫名崧翁が没。小杉樞郎が幽閉される。(～翌年3月)
								榎本武揚ら第2次遣欧使節が蘭に到着。	
元治1	1864	甲子	13	42	57	30		原鵬雲「山水図」。薩摩藩士19名渡欧。高島五郎が開成所の教授職並となる。	仏公使ロッシュが着任。(親幕派)
慶応1	1865	乙丑	14	43	58	31		高雲外が徳島洋学校教授(～明治3)。5月、福地源一郎ら第3次遣欧使節(1年間)、原鵬雲「翠蘭島釈仏墓表之図」有持阜平が徳島洋学校助教。	第2次長州征伐。徳島洋学校が開設。
慶応2	1866	丙寅	15	44	59	32		長井長義が長崎に留学して蘭人マンスフェルトらから学ぶ。高橋由一がワグマンに入門。	薩長連合。福沢諭吉『西洋事情』初篇刊行。
慶応3	1867	丁卯	16	45	60	33	3月	榎本武揚らが軍艦「開陽」と共に欧から帰国。中村正直ら留学生が英国で学ぶ。	英人パークスとサトウが徳島を訪問。
明治1	1868	戊辰	17	46	61	34	8.6	原鵬雲の長男が夭逝。	1月に蜂須賀斉裕が没。福沢諭吉が慶応義塾を開く。戊辰戦争。函館で榎本ら降伏。
明治2	1869	己巳	18	47	62	35	3.14	文五郎の弟安蔵が14歳で没。	西の丸長久館が再置。阿部有清が洋算教授となり、秀翠塾を開く。昌平黉が大学南校。版籍奉還。
							9月	藤田豊八が出生。長井長義が大学東校入学。	
明治3	1870	庚午	19	48	63	36	4.4	原鵬雲が徳島藩学校并医院掛三助教授となる。	足軽が「卒族」となる。庚午事変。佐香貫古が没。岡本晤室が一等教授となる。高雲外が長久館洋学伝習所教授となる。有持阜平が大阪開成所で蘭人ハラタマに学ぶ。
							7.12	鳥居龍藏が出生。	
							10.28	原鵬雲の次男が夭逝。	
							11.2	喜根井文五郎の子陽次郎が出生。	
明治4	1871	辛未	20	49	64	37		金沢由喜三郎(後の岡本対南)が出生。	柴秋軒が没。廃藩置県。11月、岩倉使節団107名が欧米へ出発。長井長義が独国留学。
							7.10	原鵬雲が徳島洋学校助教として図画を教える。生徒の守住勇角が助手としても手伝う。	
明治5	1872	壬申	21	50	65	38	7.15	喜田貞吉が出生。	蘭人土木技術者ファン・ドールンが来日。5月、太政官布告で卒族が廃止されて平民になる。
								林森太郎が出生。	
								高雲外が太政官左院二等書記生となる。	

年号	西暦	干支	喜根井家		晤室	鵬雲	日付	喜根井家・岡本家・守住家・原家・高家の事象	徳島・日本・世界の事象
明治6	1873	癸酉	22	51	4	66	39	6.13 林鶴一が出生。 井上辨次郎が渡英して絵を学ぶ（4年間）。高島五郎が藩命で渡欧（翌年帰国）。	徴兵令。地租改正。寺島宗則が参議兼外務卿。9月岩倉使節団が帰国。蘭人土木技術者デ・レーケ、エッセルらが来日。
明治7	1874	甲戌	23	52	5	67	40	7.15 原鵬雲が文部省13等出仕に補せられる。 原鵬雲が官立広島師範学校で図画を教える。	箕作秋坪が東京師範学校長。小杉樺郎が東京に出て太政官修史館で勤務。東京医学校。
明治8	1875	乙亥	24	53	6	68	41	守住勇魚が東京に出て影技堂画塾に学ぶ。伊人キノネが大蔵省紙幣寮の技師に招かれる。	徳島に慶応義塾分校。独人ナウマンが東京大学地質学教室の初代教授。
明治9	1876	丙子	25	54	7	69	42	守住勇魚が工部美術学校で伊人フォンタネージに画を学ぶ。貫魚も東京に行き、小杉樺郎と同居。 3.19 原鵬雲の嗣子 廣磨が出生。	秩禄処分。独人ベルツが東京医学校で教える。米人クラークが北海道農学校で教える。11月に徳島慶応義塾分校が閉校。
明治10	1877	丁丑	26	55	8	70	43	原鵬雲が広島県立師範学校で図画を教える。油彩「楠公桜井驛図」。井上辨次郎が18歳で没。	西南戦争。福地源一郎が従軍記者として活躍。クラークが日本を去る。改編で東京大学が誕生。
明治11	1878	戊寅	27	56	9	71	44	9月にフォンタネージが帰国し、守住勇魚が工部美術学校を退学し大阪に行く。	大久保利通が暗殺される。有持阜平が徳島師範学校と徳島中学校で化学を教える。
明治12	1879	己卯	28	57	10	72	45	8.1 原鵬雲が広島に流行したコレラに罹り45歳で没。 守住勇魚が大阪専門学校画学教員に就任。武田丑太郎が徳島尋常中学校で数学を教える。（～大正6年）	日下部鳴鶴が政府書記官を辞して書家となる。立広作が34歳で没す。岡本斯文が徳島中学校初代校長心得となり、同校の基礎を築いた。
明治13	1880	庚辰	29	58	11	73		守住貫魚が72歳で勇魚のいる大阪に移住。	楊守敬来日（～明治17）。野間信濃が出生。
明治14	1881	辛巳	30	59	12	74		箕作佳吉が欧州から帰国し、東大理学部で教える。 6.1 岡本晤室が74歳で没。	1月、新居湘香が徳島尋常中学校長となる。（～明治17年）。大滝山に「招魂碑」建立。
明治15	1882	壬午	31	60	13			小杉樺郎が東大古典講習科で准講師となる。林鶴一が10歳で徳島尋常中学校に入学。 藤田豊八が徳島尋常中学校に入学。	東京上野で第1回内国絵画共進会。福地源一郎が立憲帝政党を結党。芳川顕正が東京府知事。
明治16	1883	癸未	32	61	14		11.14	文行が61歳で没。文五郎が4代目当主となる。 守住貫魚の発起で難波画学会が設立。	「庚午志士碑」建立。
明治17	1884	甲申	33		15		4月 7月	喜田貞吉が徳島尋常中学校に入学。 陽次郎が徳島尋常中学校に入学。	蜂須賀茂韶が侯爵。第2回内国絵画共進会。長井長義が独国から帰国。
明治18	1885	乙酉	34		16			長井長義が東大理学部化学科教授となる。	内閣制度開始。森有礼が文部大臣になる。「春漁井上先生寿碑」建立。
明治19	1886	丙戌	35		17			帝国大学令で東京大学が帝国大学。長井長義がエフェドリン合成に成功。鳥居龍蔵が人類学会入会。	箕作秋坪が没。小杉樺郎らが八大洲会。新居湘香が北海道庁属となる。
明治20	1887	丁亥	36		18		12月	喜田貞吉が徳島尋常中学校を中退し、第三高等中学校予科臨時募集に合格。	橋本晩翠が86歳で没。
明治21	1888	戊子	37		19		1.6 1月 10.1	文五郎の兄 與一郎が40歳で没。 喜田貞吉が大阪の三高予科に入学。 文五郎の女兒（松葉竹静童女）が夭逝。	長井長義が理学博士となる。 坪井正五郎が帝大理科大学で助手として勤務。
明治22	1889	己丑	38		20		9月	三高は大阪から京都に移転。陽次郎が京都の第三高等中学校に入学。 大阪で守住勇魚が古画会を主催。	長尾初太郎が没。大日本帝国憲法発布。高等中学校・帝大の学費を大幅値上げしようとするが森有礼が暗殺され中止。榎本武揚が文部大臣。
明治23	1890	庚寅	39		21			守住貫魚が帝室技芸員となる。蜂須賀茂韶が東京府知事・東京市長を兼務。鳥居龍蔵が上京し小杉樺郎の家に滞在。有持阜平が樟脳製造法で特許をとる。	三木順治が貴族院議員。夏目漱石・正岡子規が帝大に入学。教育勅語発布。新居湘香が東京府庁に勤務。芳川顕正が文部大臣。
明治24	1891	辛卯	40		22			蜂須賀茂韶が貴族院議員。	久次米銀行が休業。濃尾大地震。
明治25	1892	壬辰	41		23		2.26 8.20 1.3	守住貫魚が大阪の自宅で84歳で没。 文行の妻カシが64歳で没。 有持阜平が65歳で没。	久次米銀行を引き継いで阿波銀行が創業。井上春洋が81歳で没。坪井正五郎が帝大理科大学教授となり箕作秋坪の長女と結婚。
明治26	1893	癸巳	42		24		7.10	喜田貞吉が23歳で帝大文科大学国史科入学。 鳥居龍蔵が帝大理科大学人類学教室で標本整理係。	井上高格が没。芳川顕正が司法大臣。
明治27	1894	甲午	43		25		5.10 7月 9月	喜根井本家の興平が没。 陽次郎が第三高等中学校を卒業。 陽次郎が帝国大学理科大学に入学。	7月、日清戦争が始まる。土井晩翠が帝国大学文科大学に入学。岡本韋庵が徳島県立尋常中学校長となる。
明治28	1895	乙未	44		26		5月	陽次郎が帝国大学理科大学を中退。高雲外が没。 守住勇魚が同志社で画学を教える。 岡本対南が徳島中学校で教え始める。	2月、日清戦争が終わる。4月、京都の第4回内国勲業博覧会で黒田清輝が裸婦像を出品。
明治29	1896	丙申	45		27		5.11 7.10.	陽次郎が徳島県立尋常中学校教師となる。 喜田貞吉が帝国大学大学院に入学。	夏目漱石が第五高校で教える。（～明治32） 守住勇魚が三高助教として退職。台湾を植民地化する。蜂須賀茂韶が文部大臣。（1年間）
明治30	1897	丁酉	46		28		7月 10.25	蜂須賀茂韶が枢密顧問官となる。（終身） 林鶴一が帝大理科大学数学科を卒業し大学院に入学。 陽次郎が熊本済々養で教える。（～明治32）	「三木氏先世遺徳碑」建立。阿部有清が76歳で没。京都帝大ができる。坪井正五郎が講演のために来徳。
明治31	1898	戊戌	47		29		8.20 12.6	喜根井家の男（秋雲智寂居士）が没。 喜田貞吉が成田中学校長となる。	岡本黄石が没し、三木順治が墓誌を揮毫。芳川顕正が内務大臣。野間豊五郎が衆議院議員。
明治32	1899	己亥	48		30		3.6 8.2 8.7	陽次郎が中等教員化学科免許状を授与される。 喜根井家の男児（真円慈光童子）が夭逝。 喜根井家の男（専光義徹居士）が没。	堤新甫・勝海舟が没。坪井正五郎が理学博士となる。
明治33	1900	庚子	49		31		2.19 6.6	陽次郎が奈良師範学校で教える。 文五郎が49歳で没。	
明治34	1901	辛丑	4代		32		7.19 12月	陽次郎が奈良県市町村立小学校教員乙種講習科講師となる。 陽次郎が徳中同窓会誌「渦の音」に投稿。	バリ万博。夏目漱石が英国留学。
明治35	1902	壬寅			33		9月 3.4 11.11 7.14	吉川実夫が東京帝大理科大学助教授。 陽次郎が中等教員物理科免許状を授与される。 陽次郎が広島県立忠海中学校で教える。 陽次郎が第六高校にて文部省夏季講習を受け物理及び化学科の講習修了証書を授与される。	福沢諭吉が没。 土井晩翠が欧州遊学。

年号	西暦	干支	喜根井家		日付	喜根井家・岡本家・守住家・原家の事象	徳島・日本・世界の事象
明治36	1903	癸卯		34	9月	新居湘香が札幌農学校で漢文を教える。	夏目漱石が東京一高・帝大で教師となる。
明治37	1904	甲辰		35	6月	守住勇魚が作品頒布会を開く。	2月，日露戦争が始まる。「吾輩は猫である」刊行。
明治38	1905	乙巳	6代	36	10月	岡本斯文が藍綬褒賞を受ける。	5月，日露戦争が終わる。
明治39	1906	丙午	0	37	1.1	陽次郎の長男正一が徳島で出生。	鉄道国有法。満州鉄道設立。
明治40	1907	丁未	1	38	7.11	喜田貞吉が東京帝大文科大学講師となる。	小杉樞郎が大成中学校長。
明治41	1908	戊申	2	39	7.7	喜根井本家の永太郎が没。	日露戦後恐慌。日清汽船会社が設立。
明治42	1909	己酉	3	40	1月	吉川実夫が独国学留学。原鵬雲の孫娘ユカカ出生。	三木順治が没。小学校6年制。
明治43	1910	庚戌	4	41		野間清司が大日本雄弁会を興す。	森魚潤が没。伊東博文が暗殺される。
明治44	1911	辛亥	5	42	3.22	陽次郎が従七位に叙せられる。	大逆事件。日韓併合。
明治45	1912	壬子	6	43	3.29	小杉樞郎が没。南北朝正閏論問題。	
大正1	1912	壬子	6	43		野間清司が講談社を設立。林鶴一が東北帝大数学科の主任教授となる。喜田貞吉が休職。	辛亥革命。グラバーが没。吉川実夫が京都帝大理工科大学教授となる。
大正2	1913	癸丑	7	44		喜田貞吉が京都帝大専任講師となる。	清朝皇帝が退位。明治天皇が没。
大正3	1914	甲寅	8	45	光子		モラエスが神戸から徳島に移住。坪井正五郎が没。
大正4	1915	乙卯	9	46		野間光子が今治市大島で出生。	7月，第一次世界大戦が始まる。
大正5	1916	丙辰	10	47	8.3	陽次郎が東北大学で文部省の夏期講習を受け物理及び化学科を修了する。	吉川実夫が没。
大正6	1917	丁未	11	48	9.7	5月，陽次郎が正七位に叙せられる。正一が広島県忠海小学校3年生。11月，瀬戸内商船が開業。	阿波製紙㈱創設。夏目漱石が没。
大正7	1918	戊午	12	49		陽次郎が愛知県田原町立中学成章館で教える。	野口小蘗が没。ロシア革命。
大正8	1919	己未	13	50	2.10	武田丑太郎・新居湘香が没。	蜂須賀茂韶が没。
大正9	1920	庚申	14	51	12.20	陽次郎が東京高等師範学校で文部省教員講習会を受け，講習修了証書を授与される。	三木康治が議員。第一次世界大戦が終わる。スペイン風邪が流行。
大正10	1921	辛酉	15	52		正一が渥美郡立成章中学校に入学。脇町の内田風雲堂薬局が開設。	海部花が没。朝鮮半島で三・一独立運動。
大正11	1922	壬戌	16	53		喜田貞吉が京都帝国大学教授となる。	芳川顕正が没。戦後恐慌。第1回メーデー。
大正12	1923	癸亥	17	54	2.12	陽次郎が徳島県脇町中学校で教え始める。	
大正13	1924	甲子	18	55	3月	正一が脇町中学校を卒業。	日下部鳴鶴が没。水平社設立。
大正14	1925	乙丑	19	56		正一が松山高等商業学校に入学。	9.1，関東大震災。
昭和1	1926	丙寅	20	57	4.25	陽次郎が脇町中学校を退職し教諭心得となる。	喜田貞吉が東北大学講師となる。
昭和2	1927	丁卯	21	58	8.20	陽次郎が脇町中学校を完全退職。	ラジオ放送開始。治安維持法。
昭和3	1928	戊辰	22	59		守住勇魚が74歳で没。	NHK設立。
昭和4	1929	己巳	23	60	3.4	正一が松山高等商業学校を卒業し代用教員となる。	金融恐慌。農村が苦境で身売りが行なわれる。
昭和5	1930	庚午	24	61		長井長義が85歳で没。	井上勲が没。
昭和6	1931	辛未	25	62	2.10	正一が代用教員を辞め講談社に入社。	世界大恐慌。就職難。モラエスが没す。
昭和7	1932	壬申	26	63		正一が講談社を辞め瀬戸内商船に就職。	浜口首相が東京駅で撃たれる。
昭和8	1933	癸酉	27	64	7.22	陽次郎の妻チヨが没。	稲田邦植・松浦徳次郎が没。満州事変。
昭和9	1934	甲戌	28	65		陽次郎の祖父野間豊五郎が94歳で没。	蜂須賀正韶が没。5.15事件で大養毅が没。
昭和10	1935	乙亥	29	66	11.11	光子の祖父野間豊五郎が94歳で没。	国際連盟脱退。
昭和11	1936	丙子	30	67	10.4	林鶴一が62歳で没。	
昭和12	1937	丁丑	31	68	3月	原鵬雲の曾孫，原廣顯が出生。	2.26事件。
昭和13	1938	戊寅	32	69	4.18	文五郎の妻ムメが85歳で没。	
昭和14	1939	己卯	33	70	2月	正一の長男隆彦が今治で出生。	日中戦争。南京事件。
昭和15	1940	庚辰	34	71	12.16	東亜海運株式会社が日清汽船会社を吸収合併し，正一が門司支所勤務で一家転住。	美馬儀一郎・三木康治が没。国家総動員法。
昭和16	1941	辛巳	35	72	3月	正一の長女泰子が今治で出生。	
昭和17	1942	壬午	36	73	7.4	喜田貞吉が69歳で没。	TV放送開始。ノモンハン事件。国民徴兵令。
昭和18	1943	癸未	37	74	8月	陽次郎が71歳で没。	日独伊三国同盟。大政翼賛会。
昭和19	1944	甲申	38	75	11.22	陽次郎が71歳で没。	12月，太平洋戦争が始まる。
昭和20	1945	乙酉	39	76		北九州の喜根井家に焼夷弾が落ち，妻の光子がボヤを消して善種の肖像画軸を守る。	ミッドウェー海戦。
昭和21	1946	丙戌	40	77	8.8	正一が会社清算で退職し探石会社に就職。	英語の使用禁止。イタリアが連合国に降伏。
昭和22	1947	丁亥	41	78	9月	正一の次男恒兄が出生。	学童疎開。東南海地震。
昭和23	1948	戊子	42	79	11.9	原鵬雲の嗣子廣磨が71歳で没。	8.6，広島原爆。8.9，長崎原爆。ソ連参戦。8.15，太平洋戦争が終わる。11月，財閥解体。12月，農地改革。
昭和24	1949	己丑	43	80	4月	正一の三男宰が出生。	11月，日本国憲法公布。12月，南海地震。